

NO.454 Pensoj flugas trans la land - limon
THE SENRYU ZASSHI



二月号

テスト "兼題" T 5 着

JII 柳 雑 誌 社主催

句 社 三月 会 本

呈 柳 席 会

> 賞 話 題

兼

題

K

会

時

日

三月八日

(月) 午後六時

何をおいても出席しましょう。

いのちある句はそこから生まれます。

寺(211)一四七八番)

大阪市南区千日前電停スグ北側

みがきぬかれた

難の

酒

えらばれ

(三包)

麻

生 路

郎

岩本多 久 志

選

Ė 選

男

(F) (年日)

進

三題

(当日発表

紛

れ」(三世

合各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞 村 好 郎

★投句だけの方は郵券三十円同封 摩天郎・いさむ・南宗・文秋・庸佑・ 柳宏子 - 舟遊 与呂志・清人・水洞・すすむ・薫風・ 八郎

(三月七日着便)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地 JII 柳 雑 誌 社 句

電 大 阪 (671) 六 0 会 八 部

> 招特撰 (化鉄ケース入)一、八リットル詰・一、三〇〇円 恩太

···

灘 西宮酒造

ニホンサカリ

本

盛

超特撰

旗

疑いもなく 今夜も眠りにおちる

彼の女に手紙を書きかけたまま逝く

パパのバカと女に言われたがる

不朽洞句帖

麻 生 路 郎

林 生 聞 以

線の細い歌手に 空はいよいよ蒼くベッドのグロに 入歯が落ちている

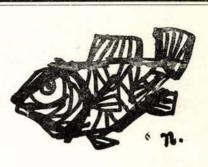
大臣が田舎者であるのも 暴力か

どうして そう戦争がお好きなの



川柳雜誌★三月号目次

★柳 樽 室	「奥 さ ん」	一路集 「	金儲	柳界展	地 柳 壇	門講		円	近作柳樽		柳	*	朽洞の人	川柳「下座」	川 柳 太 平 記	志寸		江戸川柳と紋章	石川柳と	特 鳥を語る諸家	路郎先生侍史	春長壽のは	女でありすぎる	傍柳初編研究	代 柳 人 録	名句抄の鑑賞	朽 洞 句	題字:麻
		野		★ 不朽洞会				北北	川麻							本	東	阿		宏子	木			重義・清 博和風・高須啞三		麻		生路郎·表
	出一			から		水			村生好路		生路		喜由		士士	多	野	達	津路	三阿瓢太	村	野	実	三味· 藤 前		生	生	紙 ::
郎		平				白	75	巣	郎郎		郎		氏の火		鞍	柳	大	義	-	幸・枸棄坊	水	大	新	井和田喜代			路	野尻
生:	選	選::	選			柳:	選 ::	選 ::	選選	家 ::	選 ::		巻 :::		馬 ::	志:	八 :	雄 ::	朗:	治柳•	洞	八	子 ::	雄人		郎	郎	弘
46		36		39	41	18	27	30	22	15	6		39	40	31	25	26	28	27	32	22	20	16	12	38	4	3	



麻桑

路也

郎言

る。この句で言いのがしてはならないのは

「最初が」の措字である。母と子の繋がり

僕の素っ裸」で、この写真の主の感激も判

そと出かけたこともうなずける。「最初が れを貼るためのアルバムを求めに、いそい

稻こきの疲れ会社で養生す

ッとしている。 出動はしたが会社の椅子にもたれてボヤ

きる。」 「イヤ。きのうの日曜は夜おそくまで稻こ 「どうした? からだでもわるいのか。」

「会社だけでも食えず、百姓だけでも食え

してもらおう。」 「全くその通りだ。きょうは会社で養生さ 月の忙しさをズバリと描き出させた手腕は

ろう。そんな時、そばにいた子どもに、お

ても叱られないのが羨ましかったんだ

前は大きくなったら何になると言ったら

ポクは白バイのおまわりさんになるよ」

見ていて、こんな句が生まれたとは素晴ら

に走りぬけただけなんだよ。それを立って か。ねえ、君。白バイがいかにも楽しそう

しいではないか。あんなにスピードを出し

読してホントにほおえましくなるではない

技巧も何もない、見たままの句だが、一

白バイのいと樂しげにはしりぬけ

二五二

首もよう斬るまいよ。 「どうぞ、ご随意に、会社も手不足なので これが地方の会社の現状らしい。

二五四

と言う激しい音までが聞えて来そうな句 とたちどころに答えるだろうネ。バリバリ

二五三

アルバムの最初が僕の素っ裸

がそこにあるからだ。 (二五五)

一本を二回に喫うた十二月

春

巣

を又とりあげたというのであろうか。誰で こへ置き、用務を果たしてから、そのタバコ もよくやることには違いない。 誰もが見のがすような、まことに、ささ 師走の忙しさに、喫いかけたタバコをそ

二五六

凡手ではない。

鍵一つずつ持って冷たい飯を食べ

もあるが、一人で冷たい飯の食卓につくあ でもあるし、お互いに拘束されない自由さ 鍵一つずつ持ってのアパート生活は便利 (多久志) はある。ところが、この句のアルバムは亡き アルバムの一冊や二冊 じきなさもある。

どこのうちにも、

母の遺品であることが想像される。パッと

あけると、その最初が僕の素っ裸の写真だ

た愛児を素っ裸で撮った感激も判るし、そ ったと言うのである。若い母が丸々と太っ

必ずしも冷たい飯を食べた訳ではなく、 い世代の共稼ぎには通用しないかも知れな 切ではなかろうか。尤もそうした感情は若 ない、食事を象徴したものと解する方が適 「冷たい飯を食べ」は愛妻のいないあじき 今は電化時代だし、炊飯器もあるから、

あられ非情失意の人の頬叩く 一五七

が擬人法であるだけにピンと来るではな れるだろうかというのである。句の構成 ば骸は非情だと言って、黙って見ていら の頰をイヤというほど叩きつけたとすれ は思うが、ボソボソと歩いてゆく失意の人 情を求めるとしたら、求める方がムリだと 骸は非情なものだ。その骸に喜怒哀楽の

一五八

お世辞まいてまいてテレビの取材

いなことをとりあげ、しかも、それで十二

浮彫りさせる言動として適切だと言えよ ってのける。そこを巧みにつかんでいる。 の方はずいぶんぶえんりょで、がめつくや 一まいて撒いて」の重語が、取材班を では淀みのないお世辞をふりまくが、仕事 テレビの取材班にとっては痛い句だ。口

一胡

母と来た旅は互いに流し合い

子

でにないのよ。出て来てよかったと思う 「こんなに、のびのびしたことは、いまま

出てしまえば、何んでもないのよ。

お母

さんだって、ちょいちょい温泉にいらっし やるじゃないの。」

きあいだからしようがないわ。」 「そうかしら、半分は遊びだと思うけ 「そりやそうだけど、あれはご商売のおつ

軽い穿ち句である。 に際限なく続くのである。情味のあふれた お湯の中で、こうした会話が、母娘の間

二六〇

とりまきが甘やかしとる自信過多

容

か、とりまきと言うことになる。これで ごもっともだと通す連中が、いつのほどに 寄ってたかってベコベコする。その中で、 は自信過多にならざるを得ないではない お世辞のうまい奴や鷺を鳥だと言われても な自信過多症の患者が多いものだ。陣笠が 政治家の大物というのに、この句のよう う。

二大こ

小さな抵抗ボタンつけぬまま三日

さんは、ひっこみ思案すぎるんだわ。お父で来たがそれは小さな抵抗に過ぎないこと と思う。 に思えたと言うのであろう。いかにも人妻 もいが、ムラムラとおき、三日もそのます の僅かな時間でつけられるボタンではある らしいモヤモヤを巧みにキャッチしている が、彼女につけさせたらいいのにというお 夫のシャツのボタンが落ちている。ホン (酔夢)

二六三

犬の足跡残しセメンはかたまりぬ

過ぎないという諷刺をねらったものと思 修理した。フト見ると、いつの間にか犬の に過ぎないのだ。思うて見れば人間もどっ かへ僅かばかりの足跡を残して姿を消すに ろうが、なかろうがその使命を果たしたの 足跡が残っている。セメンは犬の足跡があ 玄関のたたきが荒れたので、セメントで

目迎目送されて美人が下車します

も目送した一人であるのも面白い。美人が 下車するのを目で迎えているのと、下車す 車中からの一瞥を句にしたもので、作者 いが、あまり忙しい日で

と言った。心あたりはな

だと言えよう。 て、男心をあらわに放出している点は同じ ないが、その美しさにひかれ、自分を忘れ れている。目で迎えている人と、目で見送 っている人と、それぞれの思いは同じでは

二六四

入墨の鯉の頭へサロンパス

その鯉の頭のあたりへ、ペタリとサロンパ スを貼っているので、往年の旺んな親分と んで鯉の入墨をしたものだ。この句では、 いう感じが消え失せていて一種のあわれを あわれな姿を描いているのである。 ーモラスどころか、人として枯れてゆく、 鯉は勢いの強い魚なので、俠客などが好

きさろ子)

もようしたのである。

の寿命はどうすることも出来なかったので

その枸杞もアロエも茂りに茂ったが人間

読ユーモラスな感じのする句だが、ユ

一六五

思う美人が来 保険屋でなけりゃと

(素身郎

鬼に角応接へ通しておけ 方がご面会ですよ 「いらんことを言わずに、 「係長さん、とても美しい

るのを目で送っている情景が巧みに描写さ ある。 もなかったので、会う気になったので

春旦) で、背筋が寒くなったというのである。サ しい美人だ。ところが保険の勧誘だったの ラリーマン心理の一面を衝いたところが面 さて、会って見ると、なるほど、すばら

枸杞アロエ茂ったままに死んでゆ

行する。枸杞がいいと言えば、枸杞を競っ て植える。俗に医者いらずというアロエが いいと言えばアロエを植える。 りでない。そこで、民間薬のアレコレが流 不老長寿をのぞむのは、支那の皇帝ばか







麻 生 路 郎

大阪市 市 場 没 食 子

古い古い「夫婦生活」出して読む 春早々三度も妻に葬くる用

西宮市 若本多 久 志

無理すれば返えせた筈の年を越し

利潤追求ご人格とは別だった デモの列ふくれるとこへヘルメット

高槻市 若 柳 潮 花

舞い扇一本女ささえる色が派手 酔い覚めの水汲みに立つ灯をともし

酒の座になって女の弱さ聞く

大阪市 正 本 水

客

三月ほどして引越したこと言うてくる 風の音しきり餅やく気にもなり 腕時計したまま女寝るという

大阪府 西 6 わ を

心境の変化と言える年だから

玄関に生花がある寛り

青年につられて走る駅のそば

六十になったら溜ると聞いたけど

月の奈良

猿沢の池に凍てつく鯉もあり

大阪市 北 III 春 巣

ご機嫌はお目出度うへもさんをつけ

クコを煎じる火種絶やさぬ三ヶ日

忘年会新年会歯を抜くひまがなし

釣のない車掌鞄をのぞかさず 臆病な犬のおかげでボヤですみ

師の影を踏まず育った過去を云い

大阪市

後

藤 梅

志

有耶無耶で居るのに寿命ばかり延び 初詣りらしい格子のひらく音 幼稚園火災お寺も遂に焼く

ハワイ 羽佐間 柳 楽

おしっこの世話まで二号してくれず

選

新陳代謝砂針老を刻みゆく 物識りが寄れば話の腰を折り 謝れと真相を知らぬ人は言う

謙遜を卑屈と時代の眼には見え

市

吉

田

1

読めぬ軸掛けて結納無事に受け くれたからもろた名刺でもめ始め 取りたてのドライブだけに断られ その割に貯めてなかった共稼ぎ 予算から二級に落ちた花見酒 行詰ればよせる首相が羨まし りんしょくも三代続くお家柄 雑巾も縫えぬと知らず仲に立ち

美辞麗句だけではすき腹納まらず 倖せな口絵暮れには離婚沙汰 社会鍋師走の足はふり向かず チンピラのビンタで出入の口火切り 泣どころ知られて角が歩に喰われ 防府市 長 野 井 蛙

岡山県 直 原 七 面 Ш

生活の疲れに女際を見せ



鳥籠のような団地へお引越し 倦怠期言葉つきまで他人めき

鳥取市 河 村 H 満

事務的な酌へコップにする師走 大掃除部長以上はどろんする

元朝を素直にさせる特級酒

倉敷市 木 村 干 容

さがれとはいわず新聞とりあげる 神父さんそっくりの秘書ついてくる 踏み石になって一生恙なし

笑えない竜の日記のしめくくり

てれくさい素振りはするがまた遅刻

加賀市 野 村 味 平.

飼犬を放せばワイフに泣きつかれ 値上りへ主婦は必死でつめよれど

大阪市 木 村 水 洞

新春放談不発ばかりを並べ立て

倒産も救えないのに他国の世話

年賀状出せる師を持つ倖せさ 破産してから恵比須さんと縁が切れ

人倫を守り通した屠蘇の味

初詣で出来る体に立ち戻り

感謝して押す元日の出勤簿

天人が五年たたずにど多福に

岡山県

浜

田

久米

雄

公共のために手放す土地なれど

死ぬときは断くもありたき本を読む

そのものズバリを女受けてたち

借金が叶うて生気取り戻し

盲目を苦にせず語る仏顔

夜の汽車説法じみた酒談議

吸い込まれるように床柱へ座り

出雲市

尼

緑

之

助

いのししが来ていたそうな夜が明け

健康が一番という人に会い

米子市 小 西 雄 H

辞退するどころかとびつく名誉職

栄進へ七人の敵うるさすぎ

受付も退庁時間はよく守り

好きだとは云はずに女は金を貸し やりくりとへそくりしては妻疲れ

かくし芸二号にならったとはいわず

アルバイトが包んだらしいこの歳暮 お手盛りの値上げうらやむ医者仲間

加賀市 那 谷 光 郎

数珠で撫でキット治ると信じさせ

医療協けんか腰ではまとまらず

投書好き夫人へご用聞きも世辞

灯明へ豆電がパッと点く文化

大阪市 福井野

迷 路

土曜日の銀行辷り込みセーフ

高槻市 福 田 T 路

山陰は雪天気予報に腹が立ち

大阪市

水

谷

竹

莊

月の風大阪もあわただし

ガス風呂で宵から稼ぐ肌みがく

大阪市 山][] [11] 茶

京都市

大

鶴

喜

th

小悪は賢小善は愚の実社会

昨日逃げたのが寄ってくるメーキャップ

大人なら働きんかいなと子が叱る

トランプに敗れて立てば月いびつ

尼崎市 月 酔いざめの目の上に頼りきる妻の瞳が

雪浅しダルマに土がチト混 女医さんに貰ったペンで熱しるす

小 林 文



玄関で背の淡雪をいたわられ

スモッグを知らず地下鉄通り抜け

岡山市 服 部 + 九

平

足踏みの自転車骨董めいて見え

蟻壁を登りきっての自己過信

宝石の売り場へ勤めて嫁き遅れ

西宮市 若 林 草

右

七草の粥口にあう年となり

牛乳瓶並んだままの三ヶ日

岡山県 田 村 藤 波

若すぎて茶のみ友達とも言えず

睡もせず美粧院の夜が白み

テレビから流れる佳き日の千代八千代

鳥取市 森 本 法 泉 子

鳥一っ飛ばず砂丘の冬枯れて

故里は汽車の煙も美しい 看護婦の今日は世帯のことにふれ

岡山県 本 田 恵 朗

子宝の無いのがダイヤ光らせる ユーモアの判る紳士でライオンズ

堺 市 高 崎 雄 声

新幹線軍靴を運ぶ世となるな

宝石を見るとき女まばたかず

母 死 去

初詣で欲へ神様しんどかろ

奈良市

宮

笛

生

人間の欲七十のまだ若く

大阪市

桝

本

蔣

児

たまさかに妻との旅は母キトク

仕事の鬼はたで見る目も小気味よし

藤 井 明

暴力も転廃業の世相なり

世間もう暴力に勝つ自信持ち

オイと呼ぶ声も中年夫婦なり

接待費けずられ酔うた振りをする

晴着に見とれて私と気付かず

見てほしい晴着きていて遅れたの

岡山県 池 Ш 古 心

ささやかな抵抗が学校をさぼり 酒呑まぬと聞いてうんざりするもつれ

手の茶碗取られて知らぬ子のテレビ

大阪府 早 JII 清 生

歳 晚歲 H

年賀状の遅配から一年が始まって 歳末列車へ並び雪しかない故郷 アジャの歴史に人の足らざることがなく

自由自由妻の換えっこすると言う

朗

雪煙りたてて転ぶはどこの人

野沢温泉スキー行

下手な真似しても転ばぬ指導員

鳥取県

Ш

中

蛙

眠 子

倉敷市 野 H 素 身

郎

新宿に詳しい労組幹部なり 大毛虫うごめく如しデモの列

蛇のごとさとし蛇のごとずるし ダム頻増瀬音の聴けぬ飛驒となり

岡山市 林 葵 Er,

団地族見栄という字のしつけする あさましや賀状も四円のへならび

宮中のしつけに妃殿下やせ給い 血と汗の金で労働貴族肥え

神戸市 仲 E h た <

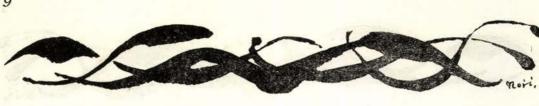
腹帯をしめるまではと共稼ぎ 丙 午かからぬうちに生むときめ お正月男は同じ顔で居る

串かつ屋話の合うのと向い合い

運がなかったと税金納めて来

乳吞ます肌寒風も寒からず

枸杞党になった理由は安上り



女難の相だけが的中した手相

本当の米寿奥さんだけ祝い

平田市久家代仕 男

4

愛される税務署をとは虫がいい

寝た妻に赤ん坊話しかけている

大阪市 石 倉 旅

風

損得を言い出すまでの仲であり

ざわざわごみごみ合併仮事務所

老ぼれてなお陳情にある元気

賽銭を必死に投げる戎っさん

無愛想の愛想も嬉し目出度い日 談笑のあれも勤務か待たされる

大阪市

本

多

柳

志

死を急ぐ如くせかせかして暮し

大阪市 魚 住 満

続・西成界わい

六法全書が娼婦の部屋にあり トイレーからの風三本立の映画館

成人だ背広だ恋だパチンコだ 使うたらあかん年玉にぎらされ

岡山市

E

KK

谷

寝正月古い背広に見下され 日の丸の良さを見直す三ヶ日

紳士服でお礼参りの男来る

桜の二十が刑事の眼にとまり 中風の食慾に家内中困り

愛媛県 村 Ŀ 旭 童

どっち道食うだけ段畠のつづく 馬鹿といわれそうでだまっている寒さ

北風を避けて鉢の木居間におき

まだ庄屋気分で門に木魚下げ

鳥籠の中にもあった夫婦愛

眠ていても平気で講義する教授

新潟県

高

野

不

_

ステッキをついた散歩が似合い出し

がまんしておりますコマーシャル 新酒の香杜氏の汗と戻かも

高槻市 傍 島 静 馬

値上りのない蜜柑ばかりも食うとれず 新幹線便利になってやって来ず 小犬もう赤ん坊のおもちゃになっていず

潮

薄くとも素直に折れぬベニャ板 首相就任昔参宮今渡米

元の課へ又配転のお人好し

忘れ物の中の気になる二合瓶

級を貰えば正月用にのけ

青森市 工 藤 甲 吉

出稼ぎの村に三ちゃんだけ残り さい果ては灯台だけの夜となり 村貧しひねもす風の音ばかり さい果ての村人買ひがやって来る 冬が来て毛皮着る人けものめく

大阪市 西 章

雅

農機具を揃えて農家嫁捜す 清貧を自業自得とからかわれ ハイウエー地を這い天国近くなる

幼稚園ここでも根性悪るが牛耳り 食通がこんなに不味いものを食べ

横道にそれて話のおもしろし

笠岡市

木

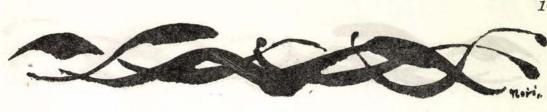
Ш

遠

日日好日新聞持って畠に出る

日日好日妻を畠へ誘いもし

大阪府 谷 沢 好 祐



京都市 室 井 八九十

能筆の故にお汁が冷めちまい 名月や池をめぐりてガムを吐き 廃鶏の運命を知るごとく産み 元旦の墨は遺言の書き加え

岡山県 横 Ш 声

赤ん坊を抱いて成人式ですのよ 賃上げストしながら値上げに反対し 免許証五十の腕に老を知り

小松市 関 戸 宗 太 郎

ブレーキの役目はたして左遷され 宮様のニックネームへ祖父あきれ コマーシャルの間に子供叱っとき 痛ましきニュース残して吹雪止む

妻あわれモンペしたまま寝てしまい 美弥市 安平次 弘 道

倒産の事務所暦はまだ師走

趣味とは恐し不精とは見えぬ父 切干しへ嬉しく寒波吹きつける 焼香へもフラッシュ有名人の死 仮病にも病名つけてはやる医者

列車遅延すまなさそうでないマイク

錠前の音を信じて家を出る

諫早市

川岡

霊

眼

子

黒い太陽などと小説よく売れる 痛くないように噛むのも猫のエチケット

不足言う毛布の工程知らずして 富田林市 浅 111

憂き世です何所へ行っても小姑

心なき冷き言葉に募る自負

愛孫のバースデー

張羅を着せて気のはる孫の守

他人の親切小金が怖がらせ

岸和田市 内 藤 古 3 子

病床へ届いたらしい年賀状 日本髪の娘等へ粉雪ひとしきり 一月の陽ざしの中に春がふと

二十年友達はみな甲斐性者 青森県 木 村

自己コマーシャルが死の直前まで続く 雑草を自負してごつい指の節

課長さん課長としての服が要り 奥 谷 弘

倉吉市

朗

家の建つ空地がいやに目にとまり

嬉しさは養女が長生きせよと言う 娘の勝気負けまいとして戻ぐみ 女房はもう寝たろうか宿の雪

我が愚痴へ相槌打った友が逝き 愛情とお金の不足でもだえてる

富田林市

岩

田

美

代

郎

なぎなたの寒げいこ見て

寒風を切ってなぎなたからみ合い

大松式をたたえて社長訓辞とし 大学へ入れて船頭の力こぶ 兵庫県 遠 II]

住

国道が走りのんびり住まわせず 貧乏な壁へお多福だけ笑い 猪の住む里の便りにはげまされ

兵庫県 河 原 7 0) 3

金がなくなると一しょに女去り

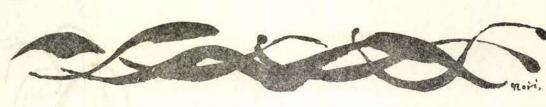
死亡欄に思う

凉

人

急がば廻れ各停にせんか 日向ぼこたのしむ吾に老い気付き 二た月ずつめくらる年の短かさよ 至近弾いよいよ僕に迫って来

人質を取られるほどに金もなく



姫路市 岐 不 新聞を焚き付けにする丹波にて

酔

年賀状やっぱり年ぢゃ字がふるい

追われるな仕事を追えと初訓辞

和服着た社長年詞に一寸慌て

社会面車と火事で年を越し

大阪市 田 中

+

方

岩水先生逝去 (二句)

出来の悪い弟子も列んで焼香す メス重し先生の指令今はなし

保

あの人の質状まだ来ぬ三ヶ日 物価高静かに想う寝正月

出雲市 111 晃 男

派手によく笑う中味のない女

職人に日曜大工ほめられる

薄情になれずに金もよう貯めず

落ちた肩友情の手に叩かれる

ボス或日誰も信じられぬ心

年末の耳は半分聞いとらず

松江市 楽 鶴

丸

借金で新築心臓ほめられる コロンブスの卵現世ならば立ち

> 私だってハッ当りして見たい日も 京都市

貧しさはも一度上敷裏がえす

上着脱いだだけ大掃除の課長

ビル勤め今日の天気も知らず暮れ

習い性トイレを掃除しつつガム 大火のニュースへ火の用心冴えて来る

兵庫県 大江 秋

テレビ料理我が家に縁の無い料理

鉛筆をなめて日曜大工さん

葬式にまでも商魂つきまとい

大阪府 田 4

やく除けのお守りつけて事故に逢い 初笑いしりもち一つおめでとう

今治市 智 水

飯抜いて抜いて炬燵がよい寒さ

昼歩く方が恐いと夜の蝶

尻餅は女であってさわがれる

逢うて来た足袋春泥をかけられる

竹原市

Ш

内

静

水

通知簿の点内の子に冷たすぎ 主婦として妻が選んだお歳暮

求 女

元旦を死者1となる人もあり

月

月 窒息死時計の針は生きていた

自分の顔に自惚れてみるさびしさ 逢わないと油の切れた機械なり

枚方市 宮 111 珠 笑

カーテンを閉じて朝寝をしてみたし 負うた子に食べさす母の手品めく 付添いの多弁を憎む麻酔切れ 一善へ自分の中に邪魔がいた

元旦も暮も御仏同じ館 初夢のない清寂の夜が白らむ 京都府 西 句 楽

坊

大阪市 森][[す 及

れ

追憶の人は今でも廿六

たちのぼる煙よ過去を持ってゆけ 顎ツンと上げて女は何を見る

新居浜市 林 孝 Œ

ミンク着て慈善鍋へは振り向かず 流行は妻まで尖った靴を履く

あっと云う間に幸運空を翔けるかも 熊本県 芳 仙

雪のごと固まり合って庶民なり

新聞も帯封つけたまま暮れる



川傍柳初篇研究

岡丸田十

府

商 領 啞三味

丸=川端・高須説に賛。

甫

川端柳風

0

藤井和紫

男の姿で人目の関をこし四月五日開

285

清二「人目の関」は、吉原大門の内むかって右側にあった「四郎兵衛が関」で、こって右側にあった「四郎兵衛が関」で、こって右側にあった「四郎兵衛が関」で、こって右側にあった「四郎兵衛が関」で、こって右側にあった「四郎兵衛が関」で、こって右側にあった「四郎兵衛が関」で、こって右側にあった「四郎兵衛が関」で、こって右側にあった「四郎兵衛が関」で、こって右側にあった。

やさおのこ待てと四郎兵衛ひっとらへ

にむずかしく、失敗した句は、次の通り沢

四郎兵衞にとかまへられるふぐりなし(タル二三)(タル一九)

四郎兵衛に女之介はとっかまり

四郎兵衛から請取り柱へくくし(タル一六)

川端=本篇19頁ウラにも、左の成功句が(タル一九)

329 四郎兵衛が男とおもふ運のよさ

番所の句に相違なし。 高須=箱根の関所も「出女」には厳重であったというが、この句は吉原の四郎兵衛

用したもの。

岡田=その通り。

286 どらの詑大工のするがしまひ也

清=放蕩が過ぎて、座敷牢に閉じ籠められていた息子。詫びがかなつて、そのなから出られることになった。さて、そうなれば座敷牢は不必要となる。そこで、出入りの大工を呼んで、とりこわすわけだが、帰ったらみじめと大工拵えてる

座敷牢大工を入れてしめてみる

郭公鳴きつるかたを眺むれば

たゞ有明の月ぞのこれる

る。だから、その大工の記び言が、一番 る。それでも駄目なら、大工は座敷牢を造 が。事情を聞いて、大工も一応は詫びを入れ でした。

> □最後の記びだ」という句である。
> 高須=手づめの意見大工まで呼びにやり (天保)で、もちろん座敷牢の相談も兼ね てである。それで、その大工の「堪忍しててである。それで、その大工の「堪忍して

287 郭公迯"した顔で様へ出る造る前に、詫びを入れる。それでよい。造る前に、詫びを入れる。それでよい。

清=駄労解だが、加賀の千代女を詠んだ 句ではないかと思う。すなわち、千代女は 「時鳥の句」を作りたくて、一晩中苦吟したが、出来なくて、ついに 時鳥々々とて明けにけり 千 代とサジを投げた。そこで、川柳家に お千代さんさぞ眠からう時鳥 とカラカわれたように、睡眠不足の顔でとカラカわれたように、睡眠不足の顔で とカラカわれたように、睡眠不足の顔である。 がしたような顔だ、というのである。 藤井=この句は、小倉百人一首の

と詠んだ後徳大寺の所謂「有明の質」を と詠んだもの。一声聞いてあわて、縁へ出た が、もう何も見えない。取り逃がしたよう な恨めしげな額。すなわち、狂歌師に 郭公鳴きつる後にあきれたる 後徳大寺のありあけの額 と笑われた、川柳版で と笑われた、川柳版で 野公後徳大寺に鼻あかせ

(傍五)

等で釈然としよう。

多いから、いろいろに考えられるが、この 句は藤井説でよいであろう。 高須=ホトトギスを詠んだ和歌、俳句は

記されたわけを、岡田先生に聞きたし。 岡崎=藤井説に賛。なお「椽」にママと註

思うといけないからである。 くべきだから、読者が誤植ではないか、と ことを示したもので、正しくは「縁」と書 たのは「原本のママ、誤植に非ず」という 示すためで、このように(ママ)と傍訓し いて、振り仮名をしてあるのは、読み方を 岡田=藤井説でよし。なお、文庫文につ

禿衆ハおまけ銭ハもどり<

とにかくわからない。 の気持ち、を詠んだ句ではなかろうか? 簡単なのだが――。お職女郎に対する遊客 清=「もどりく」の語釈が出来れば、

まけ」がわからない。牛太郎が、見世物の っている景ではなかろうか? 口上をまねて、客に呼びかけ、遊意をさそ いらはい」の見世物の口上だが「禿衆はお 藤井一「お代は見てから、さァいらはい

川端=禿の句は沢山ある。

にやるよと、客が禿を冗談半分にからかっ 等から、土産の他に小遣い銭は、帰る時 やった菓子禿どこかで食ってくる 禿より三尺上へそりや土産

ている句と思う。 高須=奥山の見世物で、主題句は、その

> ているのである。 さんなんかオマケでいゝよ」と、呼びかけ も共に)へ「サァ御代は見てのお戻り、禿 木戸番(呼び込み)の口上そのもの。御客 に連れられて出たオイラン(オバさんも禿

前田―高須説に賛。面白い句。

れたのである。 近い浅草観音や、隅田川などへ連れて行か や妓楼の若い衆が供について、吉原から程 ないが、子供の禿は年に一、二回、遺手婆 岡田 ― 遊女の外出、というのはめったに

289 うしにも馬にもふまれず女郎買

かったし、うまは宿場にはつきもの。 しは、高輪に牛町があり、この辺は牛が多 牛馬の中へわって入る四っ手かご 清―品川の女郎買いを詠んだ句― 5

(安六義3)

と同意句である。

成人して、とうとう「女郎買い」をする年 て、面白く言っただけの句である。 になった、ということを、俗諺にからませ 事に成人したことである。従って、無事に 高須=「牛にも馬にも踏まれず」は、無

と思われる。

の意があきらかでない。清氏の出した類句 前田=礎稿に賛成であるが「ふまれず」

ふか川はちょき品川はてんまなり

品川へぶち込ムよふに四ッ手かけ (天三満1)

買いに品川へ来たことを「ふまれず」にと のように、てんま船か四っ手駕で、女郎 (安三仁3)

言ったのではあるまいか。

馬にも踏まれまい」の用例がある。これに かつゑる事もなう、父親のましませば、牛 松山に「乳母といふもの有るならば、乳に まれず」の俚諺があった。近松の椀久末の 事に成長することのたとえに「牛馬にも踏 「女郎買い」とオチをつけての柳化。 岡崎=高須説賛、子供が怪我もなく、

丸二質

270 すいりゃうのわるさにきびに土団子

うのである。 が、ニキビなんかに利くはずがない、とい 梅毒であってこそ、土団子を供えれば治る に祈願するとき供える土の団子。句意は、 清=「土団子」は、梅毒患者が笠森稻荷

かわらぬとみえる。 藤井=ニキビを気にする年頃、昔も今も

稻荷へ参ったという句。 という類句がある。よほどひどいニキビ 川端=ニキビを梅毒と早合点して、笠森 ひょんなこと土の団子の御代参

す。こう解さぬと「推量の悪さ」が生きな とは、とんと見当ちがいというもの、と解 頃である。その欲しい相手さえ与えれば、 と、そんなこともあったであろう。 で、一般に医学知識のうすかった当時のこ らない。だから「推量の悪さ」と言ったの と、そこを考えずに、笠森稻荷に願をかける ニキビなど忽ち直るものを、推量の悪いこ 丸=ニキビの出るのは、異性欲しさの年 高須―川端説――ニキビは笠森様では直

> て祈りなよ」とすいめた、と解す。 った推量をして「笠森稻荷へ土団子を供え い病気にかいったかと、とんでもない間違 岡田=ニキビが出来た友人に、ついに悪

因果なむすめ兵法が上手也

とか、兵法にたけている。男に生まれ、ば こでもするはずなのに、この娘どうしたこ 武道とでも考えればいゝか。なぎなた等で よかったものを――。この場合の兵法は、 清=普通の娘ならば、琴・三味線のけい

ドキシカルに言ったのか? 前者なら男は て、共に因果なことというわけだが。 か?あの方の兵法が上手で因果だと、パラ 恐れて寄りつかず、後者なら寄りつきすぎ 藤井=「兵法」を、文字通りに解すべき

思うが。 川端=わからない。巴御前のことかとも

の「兵法」はもちろん「武芸」だが、娘の は因果なことだ」と解してよいと思う。こ ことだから「薙刀」ぐらいであろう。 高須=素直に「娘のクセに兵法が上手と

その他に理屈の多いことを言ったので、こ の「因果」には縁遠さが感じられる。 **運**う。戦争のしかたをいう。ここでは交際 前田=「兵法」は「武芸」とはちょつと

と解釈している。 岡崎=私は、藤井説の「あの方の兵法」

法は大怪我のもと」のように、単に武芸・ 武術と見てよいであろう。 丸=高須説でよいと思う。兵法は「生兵

岡田=「兵法」は、長刀・小太刀など。

にがく敷も御咄をかっけされ

清一わからぬ。

あった。すなわち 13い、智恵を出して牽頭にかっ消され 藤井=「かっけされ」が、今までに二っ

76仲条でつミだといってかっけされ

坊ちゃんにでも昔話しをしていて、途中で らよくわからない。御話しだから、大家の たのではあるまいか。 「そんな話しはつまらない」とかっ消され 今度は御咄だけが焦点なので、何の事や

句と思うが。 川端=藤井説の「太鼓持」の例句と同想

と、柳雨翁は解いている。 というのは、その蕗の意も含まれている 酸中の景を詠んだもので「にがにがし」い した、という巷説がある。この句は、その 国元からソレを取り寄せ、その人達に馳走 ホラをフクものと嘲笑され、心外に思って の蕗の話をしたところ、列座の諸侯から 高須=秋田の佐竹侯が、殿中で御国自帰

にが口を言われたが極く御残念

引いている。 という句もあると、三面子先生も例句を

軽いユーモア的な表現は、太鼓持を感じさ 前田=高須説も考えられるが、総体的に

殿中で秋田蕗の御国自慢をしたところ、諸 はとらない。高須説どおり、宝暦二年の夏 岡崎=用語、句調からみても、 タイコ説

> 侯から虚言扱いにされた佐竹侯の故事。 ふきのはなしでてうろうされたハやい

御領分しらべて蕗の論をわけ 丸=高須・岡崎説賛。類句を左に。 と家臣に無念さをこぼすことになる。

御怒で家老に蕗をしらべさせ (タル五四)

御家老は蕗の工夫でにがい顔 (タル五四)

(タル六二)

遊市の様に家老の玄関先

(タルー六一)

した句作。 「苦々しくも」で、蕗を暗示

手習をしろとぬかすとでつちいゝ

を書くんだネ」というわけ。 う少し手習いでもして、文句のわかるフミ に対する下女の返事か? 「お前さん、も 清=下手な字で書いた丁稚のラブレター

の仏頂面とみたい。下女は、自分もろくに 書けないのに、他人の字の巧拙を云々する 藤井=番頭の小言と、それに対する丁稚

という、丁稚の見栄であろう。 に生意気にも「手習いをしろとぬかした」 対して、振られたとも言えず、下女のくせ 川端=礎稿に賛。体よく断わられたのに

と、憎々しく表現したのがミソ。――字な 番頭が、オレに「手習いをしろとぬかす」 んぞというものは、若いうちに習っておく **一稚のレジスタンス。あの女郎買いに行く** 高須 = 藤井説に賛。番頭の小言に対する

> 抗といったところ。 利いている。現今の労働基準法違反への反 習いをしろとやられる。「ぬかす」がよく の丁稚には、抵抗しか感じられないのだ。 対する教えでもあるのだが、生意気ざかり てもおそい、という番頭の小言は、後輩に ものだ、オレのように年とってから後悔し 前田=おそくまでこき使われた上に、手

う小咄が出ている。 の「いちのもの」という本に「丁稚」とい 岡崎=番頭の小言説に賛。安永四年刊行

をしろとぬかしをる」 る。大方用をしまったと思へば、手習ひ 一日供に連れて歩き、帰ると使いにや 「俺が親方は、人使いの悪い人、日がな

岡田 = 同。小咄からの句作であろう。 これを、そのま、川柳にしたもの。 丸=費。岡崎氏引用の小咄、感謝。 矢一筋来てつくしとりハ迯ケ

294

この句のヤマで、つくしとりの場所や人物 は、この句の場合不特定と考えて、いゝの 逃げた、という句。謡曲からの文句取りが で来たので、それに驚いて、つくしとりは 清=「矢一筋来て」は、謡曲「加茂」か 何処で稽古しているのか、流れ矢が飛ん 「或時川上より白羽の矢一つ流れ来り」

て婦女子)が、逃げ帰ったのは、 句で、あぶないく、と、土筆取り(主とし からか「矢が飛んで来た」からだ、という ではあるまいか。 高須=「土筆取り」が逃げたのは、どこ **革狩り銃声聞いて山を下り**

> 丸=贅。 と、同巧である。

295 岡田―同。謡曲の文句取りだけの句。 猫のまん中に焼てる塩まぐろ

詠んだ描写句。――魚を焼きはじめたら、 る魚を遠巻きにして、舌なめずり。 どこから現われたか、数匹の猫、焼いてい 清=魚を焼いているところを、誇張的に

ある。 いくら猫がいても、悠々と焼いているので 高須=「塩鮪」は猫も食わぬ。だから、

るが、打つものがない。 といって、何かを表現しようとした句であ 前田=「猫」と「塩鮪」特に「まん中」 岡崎=高須説が面白い。 塩鮪を本当に猫

が食わないものとすれば……。 つた、つまらぬ句。 丸=高須説賛。「塩鮪……」の俗諺によ

は面白味を感じてもいるのである。 いている魚を取り巻いている光景に、 ているし、熱いものの食えぬ猫どもが、焼 が出ている点で、小生は一顧の価値も感じ 生魚が少なかった当時の句として、時代感 として、そうムゲにつまらぬとも言えぬ。 ものの、焼いている匂いだけは美味そうた ので、猫が集まって来るのである。写生句 岡田=「塩鮪は猫も食わない」とはいう

大伽藍面白がって咳をする

り、咳をしてみたりする。それだけの句。 その反響音を面白がって、声を出してみた 高須=特に「咳をする」と言ったのが面 清二大伽藍であれば音の反響は大きい。

でないだけに、如何にも面白い。佳句。 いろいろな法があるが、このガランとした の下で怒鳴ったり、反響を楽しむのには、 白いので、鳴龍の下で手を叩いたり、釣締 いうのは、咳というものが、平生出るもの 「大伽藍」の中で「咳を一つしてみる」と 前田=「面白がって」と言って、かえっ

句と思う。 て平凡にしてしまった。 丸=賛。「咳」で「大伽藍」が生きてく 岡崎 ― 人情の機徹をうまくつかんだ、佳

四五二号 "川傍柳初篇研究" 訂正

岡田一同

16頁上段26行目

を寄りどころに連用形にしたか」 は、清記者の書き誤りにつき左の如く訂 「岡田説=川柳では運体形で、連用 (終止) 形は取っていない。柳雨翁が何

にしたかり ない。柳雨翁が何を寄りどころに終止形 「川柳では連用形で、終止形は取ってい

·四五三号

13頁二段23行目「下戸しまり」ハ

14頁下段29行目「どれが」ハ「とれが 下戸こまり

15頁上段16行目「つづいて」ハ

三段8行目「はえる也」 ついいて

行目 俗諺(にも」ハ

はゑる也」

俗諺にも

下段22行目「三傍柳」ハ「川傍柳」

近 舟 詠 A

同

人生行路子という荷物背負わされ 宏

出動に朝のキッスをする若さ 月給で一坪買えぬ土地に住み

公 ŵ

妻に叱られて怒らぬ年となり 今治市 長 野 文

庫

下り坂妻にも子にも馬鹿にされ 客につぐついでに受ける妻の酌 そくりは夫の方がする時代

東京都 冨 # 野 鞍 馬

人間は電気機具より精巧だ

郷愁の味で正月たのしまし 大阪市 橋 本

雨

神詣りの疲れだと医師は言い 故人の年を指折ってる炬燵

須坂市 峰 児

出稼ぎの村正月をひそといる 合理化へ停年まったなしにされ 忠告へ懐手ただうす笑い

円満の秘訣は素直に敷かれてい

金儲け三国人に教えられ

すぐ消える紙幣へせめても折目つけ 倦怠期どっちも古創抱いている

下っ端の悲哀合づち打つばかり

和歌山市 秋 月 方

しあわせはどの子にも皆子が出来て 東京は遂に車の住むところ 賀状すらくれぬに突然金を貸せ 夜逃げするように産院へ移し

徴兵の無い国襟までかくす髪

労組のぬらりくらりが気に入らず

両方共叱っておいて
ぷいと出る 先生も人間慾に眼がさとい 名古屋市 長 谷 Ш 鮮

眼鏡拭くゆとり話術に馴れた人

発言も黙殺される世帯主 陽当りの良さが一番よい家相 逃げたくはないが檻から出て見たい 小心の雀うろうろ身が細り デモの日に仮病つかったへそ曲り いつからか超純潔の老夫婦

今年こそ頑張りますと言わす酒 人がきめた国境鳥は知らぬ顔 大洲市 米 沢

明

素人にたのんだ方が高くつき アイロンもお休み勝の倦怠期

帰るまで妻を写したハネムーン 初詣でもう慾張らぬ年となり 吉報は土足のままを迎えられ

今治市 月 原 筲 明



きる

まっている手紙の返事を書き急 私の屋根を雨が叩く日、私はた

うかを答えてほしい、とおっしや 用した次の句の解釈が正しいかど それを読んだか? 読んだなら引 ものを執筆され、その文中に「タ 上にあなたが "川柳雑感抄" なる るのですね。 して私のことをお書きになった。 イナー方式」をこなし得る作家と んでした。<川柳人>三九五号誌 おそくなってすみませ

裏切りの恍惚としてあしうら光 あなたの論によりますと「この

受けたのであります。

「裏切り」

この種の句が難解などとはもって 式」というのであり、作者の心理 ような句がいわゆる「タイナー方 う行為を作者は「恍惚として」で 詩界では小学生でも知っているす どをよく検討することが必要だ。 どこに、音楽的リズムはどうかな するにしろ、創作するにしろ、そ して理解さえしようとしないが、 の柳人は新子の句は"難解"だと は「あしうら光る」にある。多く はならない。心理はどこに感情は れは文字の上だけのことであって のほかである。一つの作品を鑑賞 い。さてこの句は「裏切り」とい 学的基礎勉強を柳人にのぞみた

> 驚き、そして自分が今まで知らな であります。」 うら光る」という表現になったの の異状なものに気付いているので ります。それと共に女としての性 かった自分の姿を発見したのであ た作者は自分の思わぬ心の動きに の行為を「恍惚として」感じとっ あります。その心の動きが「あし

よいものであると私は思っていま 受取り方は読者の自由に任されて 句が活字化された以上、その句の の決定版などはあろう答もなく、 す。もっとも、一句の正しい鑑賞 である私と全く一致しておりま まり心進まぬことですがペンを進 きたいとおっしゃいますので、あ のために、あえて作者の意図をき す。でもあなたが、御自分の勉強 現している。」、 られることにより恍惚とする女 その人に対する思慕の情をたち切 りを生んでいるのです。あなたは とが鑑賞者であるあなたと作者で めます。実はここまでの解釈のあ の異状な性をあますところなく表 ることが出来ないばかりか、裏切 は裏切られても、裏切られても、 表現によりこの句の主人公「女」 続けてこうおっしゃっています。 ある私とのあいだに大きなへだた 『又一方この「あしうら光る」の

ったものとして暫く作者のたわ Aさん、この後半の解釈はなか

裏切られて恍惚としたのであった私が、いいえ作品の中の「女」が す。又「逃亡の意志」を持ってい を「ふるさと」を象徴していま ませんか。「あしうら」は「母 現は少しおかしいとお思いになり なら、「あしうら光る」という表 ごとを聞いてやって下さい。もし ます。逃げたい!去りたい!

Aさん、ここまでの解釈は作者 れたのではなく裏切ったー 裏」が光ったのです。主人公の足 でしょうか。その「あうら=足の のは五体の中では「足」ではない 考えになってみて下さい。自分の が、です。ということは、裏切ら 心をまっさきに充たしてくれるも ません。裏切ったとき、はじめて ど、そう感じたのだから仕方あり 叱られるヒロインでしょうけれ の道徳論をかざしたおじさま達に 裏切り行為に恍惚とするなどとは 式により句作することによって我 うに自分の心を赤裸々に文字に表 やもわかりません。でもあなたは きと息づいてくると思うのは、あ 言語同断である、と又々文学以前 創作というのであります。この方 現することを「タイナー方式」の て下さっています。「この句の上 更に加えてすばらしい言葉を書い るいは作者のひとりよがりである 「あしうら光る」の句語がいきい 々柳人は伸々と作句できる」

ますなら、「裏切られた」受身の Aさん、もう少し蛇足を申上げ

> 場合、私の作品の中の女は、目を 凝視します。みつめられた裏切り いっぱいにみひらいて裏切り者を す。例えばこんな句になるので 者も又、目をひらいて見返しま

裏切りの潑剌として目を奪う

ライターに傷つきし闇凝視する 熱の瞳に夫の指の拡大図

さらし首裏切者は眼をひらく

しとお

下さい。句はあくまでも作者のも ませんね。意とする半分も書けま れて来ます。ここにも女の弱さが された逃亡の意志となってあらわ 者なればその多くが「足」に集約 ば「眼」が句の中心になり、加害 もあるのですから。 のであると同時に鑑賞者のもので せんでしたが、どうぞお聞き流し っぱいにうたっているのかも知れ ハリバリ音のしそうな抵抗を泪い 私の場合、被害者の位置にあれ

のお手紙を再読した。 次に私は俳句作家であるBさん 凶暴な愛が欲しいの歴史よ

すので、あなたも「Bのヤッ、どち 鑑賞が二つに分かれているようで いるかは知る由もありませんが、 この句がどのように論争されて

もたれると思い、佳句としてマー らにとっているのか」との疑問を クした責任上私の考えも述べてお

え」のシンボルだと思うのです。 上で私の言いたいことは御想像顧 と、まあ、こんなぐあいです。以 これが自分のギリギリの表現だ、 るに違いない。ちょっと危いが、 上では、たしかにそうとられるお ぬほど、私にとってはほんとの事は作者であるあなたさえ抗議でき えたことと思いますが、私はこの ママヨ、このまま発表しよう」 薄なものでない事がわかってくれ それがないとは言い得ない。しか 心配はないだろうか? 一応形の なのです)。「……あるいはこの 状態を次のように想像してみます がこれを作句、発表した時の心理 ありません。しかし、私はあなた そうですが、その程度の意識摑下 ったら、それは単にそのような浅 煙突を男性のシンボルにとられる ているというならわからぬことは のものとしてこの句が論じ合われ のは女性の、それぞれシンボルだ と棒状のものは男性の、壺状のも あるかもしれませんが、強制的な にとっては思いもよらない誤解で 「煙突」はあなたの「心のささ し二応、三応考えてくれる人があ (凶暴な) 言い方をすれば、それ (甚だ失礼なことです。 あなた フロイドの夢の分析によります

した。問違っていたらお笑い下さ は賛成です。勝手なことを書きま はない」という春三氏の意見に私 ます。「文芸上に於ける倫理性と りはしない。この根底の上に立っ うこと、これが根底になかったな は世上でいう道徳のようなもので らば世の常識も正常もヘチマもあ ぞや」と問うべきかも知れませ れが倫理であると、私は解してい ての規範であり道徳であり……そ も犯されず自由に生きてゆくとい 還りたいという願望」に於ける ん。人間が人間として、なにものに 「正常」という言葉は、「では何 と思います。なお言えば「正常に 中にうごめく女の相がそこにある 望」 ―私はそうとる―との相剋の する「正常に還りたいという願 ば「女の業」と「煙突よ」に内在 る倫理の問題もそこにあると思い は安心したのだと思うのです。 もの、それが一本の巨大な煙突に どころ」だと思うのです。言葉で り摑むことのできない「心のより あなた自身でさえ、それとはっき いう、春三氏の言葉を借りて言え シンボライズされた時、あなた 言い表わせない何かもやもやした 「鷹」13号座談会で論じられてい 「凶暴な愛が欲しいの」と の音のあいまを縫ってまだ降りつ

いが致します。実は昨年末上京の た。何だか胸のシコリがとれた思 Bさん、ありがとうございまし

と答えた声に力がありませんでし と何かを言い足りなくて「ハイ」 思いなさい。人間の性をこれまで る人が「新子はなぜこの句から兆 のお言葉を聞いたのですが、もっ れました。私は耳を傾けてその人 胸を張って言いなさい。」と申さ これは女の偽らざる心の象徴だと る。とはっきり言えばいいのだ。 昇華させ得たことを私は誇って 折もこの話が出ました。その時或 ないのだ。SEXの句と思うなら わかるが、なぜヒラキ直ってやら て心のやり場がない君のきもちは げるのだ。興味本位にとり扱われ

らまた書きます。 いこの時間がきました。戻ってか Bさん、こめんなさい。琴のけ

午後からみぞれになった雨は琴

私はお師匠さんの顔を見る。目が いてゆけなくなった。ヘンだな? んぐん高まってゆく。私の爪はつ <初便り>の三回目、調子がぐ

っとユックリでしたね。さっもう と考えごとをしていたもので。も 度初めから」 「あゝ、ごめんなさい。ちょっ

年の空白」をどうやって埋めるか 匠さんのなやみ――それは「二十 こんなことが時たまある。お師

> みると知らぬ間に二十年経ってい にあった。三十才で夫をうしな 叫ぶ日があるのだ。 子供を嫁がせ、さて一人になって ひとつで育てて来た。姑を送り、 い、あとはもう無我夢中。口やかま 然、お師匠さんの胸の中で何かが た。よくある話である。そして突 しい姑に仕えて二人の子供を女手

やりきれたものではない。 狂わせられたのでは弟子としても るのだけれど、そのたんびに琴を よくわかる話である。よくわか 「私の"女"を還して!」

アチャンになったら、又お師匠さ 生きるかがもっと大切なのではな んは同じことを呼ぶのですよ。バ れよりも今、ですよ。現在をどう カな話だと私は思いますよ。」 五年経ち十年経ち、いよくへオバ いかしら。グチをこぼしながら又 を誰が還してくれるのですか。そ 「ねえお師匠さん、その二十年

おしながら半ば自棄のように口走 するとお師匠さんは、琴柱をた

質、大きな目をしとりました。鏡 まっしゃろ。それに映った自分の を出ましたんや。」「その時やっ ャになってしもうて、走って部屋 話ばっかしなさるんで一ぺんにイ た。ほら、旅館には沢山鏡があり んだわ。そのお人が奥さんの自帰 した。そやけどなあ、あきませな 一うちにかて好きな人はおりま

> てなあ。何と大きな目やろと笑う ったもんで、うちビックリしまし てしまいました……。 などついぞゆっくり見たことなか

男性」でしかなかったのか。女と のなのであろうか。 わせは、そこにしか存在しないも いうものは、女というもののしあ も「空白」も、すべては「一人の 居る。お師匠さんのいう「充実」 哀れかな。ここにも一人の女が

りむくことをしなかった。 急いだ。もうお師匠さんの家をふ 思い出し、みぞれの中を小走りに 私はBさんへの手紙のつづきを そうでないかも知れない。 そうかも知れない。 完

GOLDEN スマートで 着心地良い 各地特約店に有り



講 門 巫

究 題 派手

研

清 水 柳

作者別に句を採り上げてみようと 出来たようである。それで今回は 者の性格を句を通して見ることが 範囲のことが着想出来るので、作 今回の派手という題は相当広い

独身でいまだに通るタイを締め 馳け出しのタレントだろうあの 居

功していると言えるが、馳け出し ある。そのうちで独身での句は成 表わすのに苦心して居られるので ているといえるようである。 の句は調子も着想もやや浮わつい れた。そして派手という雰囲気を いう字を使わないで作句して居ら この作者は五句共、題の派手と 派手なダイゼめて愉しい事があ

> おお 妻に派手娘は地味すぎるのしの

置いてあるという句は推敲が足り るのが惜しいと思う。のしのまま を深くしているが、見解の相違の 白いのだが、そのまま投げ出した が、少し説明的な感じを持ってい しい』という住い句語があって句 ような感じがした。 句は、この見解の相違という句語 ないようである、素材としては面 ネクタイの句にはせめてり愉

派手な柄まだあきらめずいる売 ネクタイを他人に言われて気付 鳩

にもソツがない。それだけにとり う一べん出直す気で入門講座に投 句して来られたのだから、どの句 年期の入っているこの作者は、も 貰うもの少し派手でも貰うとき

見解の相違派手なとは言えず

滋

雀

たいものである。 立てて問題にする句もないので、 一つ思い切った句を見せてもらい 出かけ しゃあしゃあと借着してまで妻

マスコミが派手な離婚にしてし 二句共佳いと思った。 しっかり 夢

ったが、こうした皮肉を私は採ら に化粧派手になり。というのもあ 感じさせられた。 "一周忌来ぬ間 あって、作句態度に根強いものを とした詠みぶりで適当なうがちも

持ち いかすわよ派手とは言わず肩を もやもやは派手な生活に火の手 始

深くしたのである。 "風雪の傷あ う。もやもやの句も、『火の手上 にならず、難かしい言葉の羅列に る秘仏に偲ぶ派手』は意余って句 で句にしたのが成功したのだと思 ているからである。堅くならない それは下五の "肩を持ち" が生き 終わったようである。 げょに焦点が合っているので句を いかすわよの句は佳かった。

れる句が出来るものである。 "三 虚飾なしに詠まれると共感を得ら 派手好きでよかった妻にある若さ この句の素直さがいいと思う。

> 句にも同想があり採り上げるわけ 味線が座り宴会派手になり。は古 説明を出ていないと思う。 には行かないのである。他の句は

やろか すこし派手一寸派手だと女房買 派手に買うトップさくらやない

フライバン派手に叩いてごみだ

案外句にしてみると面白い。とに なるのだろうかと思っていたのに この作者が今まであった壁をやぶ 面白い句である。 をしてほしいと思う。 かく何でも句にまとめてみる努力 った句である。こんなことが句に すこし派手の句にはうがちあって あとの二句は、

が気付く事柄なのである。 さんあるということは、だれでも ある。"ちと派手に着ればうるさ から深さをねらってほしいもので のだろうと思うが、地味でもいい い街雀』にしても同想の句がたく な句がない。それは作者の性格な 喘う世間を喘って凄い派手暮ら この作者にはアッと言わすよう 尻ぬぐい幹事にまかせ派手にや 花

るが、この穿ちは気をつけないと ッくすぐり。におちいる危険があ この句は成功している句といえ

> たが、作者が思っている程共感の 手でないキモノーというのもあっ ると思う。パーライな娘の案外派

持てない句である。 奥さんの派手に番頭さからわず

川柳に進みたいと願って居られる 者の思い出であろう。 ものを着た戦時中。という句は作 である。『派手でも地味でもある の熱意のほどには頭の下がる思い 七十何才かの女流作家である。そ を使って仕舞う迄は生きていて、 半紙一束を句箋に切って、これ

派手好きの後妻で娘かといわれ

供。勝子という句を頂いて、うれ 弱点があると思う。 た腹立ちに重ねた音なのだろう 派手な音』は客が食べ荒して帰っ しかった。『客去りて重ねた皿の 出したところ、そのお返しとして る。今年の年賀状に が、割れた音にもとれるところに いと思う五黄の巳』白柳と書いて "わたしから見たら五黄の巳は子 この作者も老年の女流作家であ "まだ僕も若

はた目には派手でもおいえはん 派手暮らしした事もなく夕暮れ

来たように感じられるのは、 最近の句には大分落着きが出て いま

大へん熱心な作者で、いつも句 お化粧は派手でも大根は値切っ 派手な柄着れるうちにとすすめ 村

との句は作者も自信を持って居ら うがちがあって佳い句だと思う。 れる句である。 第である。派手な柄の句には深い もなり鞭撻にもなり喜んで居る次 などを書いて来られるので参考に の出来た心境や、句に対する批判

ことも大切である。この作者は句 続けて頂きたいと思う。 る。私等はこうした川柳作家が一 ものを楽しんで居られるのであ を作ることも楽しいが、川柳その はあるけれども、楽しく作句する いるのである。どうかいつまでも 人でも多く出来ることを念願して 句は苦しんで作ることも大切で 理事長の手品ワハハで派手にす 寒早朝我家の鶏舎けたたまし

気に喰わぬ日の石鹸の泡が派手

よう出世しもせず派手な里がえ

と思う。 それは句の底に流れている冷酷な る。 感情が共感をよばないからである いう上五文字が生きているといえ 面白い句である。気に喰わぬと 出世の句はやや低調である。

派手に見え虚飾に見えるスター

ほしいものでなる。 んなことになった何かをとらえて ない。予算した積りだったが、こ ちの現わしかただけでは句になら 確っかりと予算した積り。の句に ということである。『派手という しても、予算した積りという気持 ことは、どの句も上辷りしている この作者の句に共通して言える

切である。自選の練習をこの上と 果たすものであるが、その多作の もに続けられることを望みたい。 中から自分の句を見出す練習も大 ことは句を練る上に重要な役割を 派手過ぎる接待そろそろ疑われ 二句共佳い句である。多作する 東京でなくても派手に使うすべ

やりくりの家計簿へ派手な化粧

この作者の句には波がある。住い 句の揃っている時もあるが今月は 色々な分野で活躍して居られる

低調であった。奮起してはしいと

思う。

プーム 年齢よりも派手に着こなすのも

れたらいいと思う。 も、それ以上のものを持っていた 赤字』にしてもその通りであって なる。 "派手好きな妻で今月亦 だけでは余情も余韻もないことに い。枠から外れた句も少しは作ら であるが句もキッチリ割り切れる 物事をキッチリすることは大切

る。人によってそうした時季の長 けてほしいと思う。 歩してゆく上の道程だと考えて続 うか出来なくなっても、それが進 来なくなると止める人が多い。ど たのしいことである。併し句が出 い人があるが、どちらにしても、 いといった時季の作者の現在であ 句を作るのが面白くて仕様がな 中年の派手な方から柄えらび

賞金をあてにせぬのが派手に勝

派手な口たたいた人がいつか消 派手な挙式に離婚の予報がこぼ

も作者の意志が盛られていて、そ 三句共佳い句である。どの句に 新世帯派手に散らかして家を明

る点に同感出来ない。 鼻の座が派手で忘却からのがれ

まあ派手な体操みんな留守でよ

十代も人の子勝って派手に泣き

れが共感をよぶのである。『派手

好みとうとう牢屋に夫送り。は作 者のこしらえごとのように思われ

兼もなく好きな事が詠えるの は、これこそ極楽であろうと思 に恵まれた環境にあってだれに気 いうことは有難いことである。殊 老後に川柳の作句をたのしむと わが腹の痛まぬ金だ派手にやり 喪服着て役員派手な記章つけ

く採り上げられなかった。 特ダネ』 "汚職"の句は類想が多 じたのは"十代』の句である。" 派手か知らそうだと言えば気に 落ちついた作句を頼もしいと感 結婚も離婚も派手に週刊紙

を知っているだけにどうにも頂け の句は佳い句だが、"松の内すこ とに気をつけてほしいと思う。こ が、じっくりと句の深さというこ 作句に取組んで居られるのである し派手ねと若返り』などは、古句 熱心な作家であって、真面目に

句というものは、一足とびに佳 派手好きの妻は何処へも顔を出

じることが出来るのである。 抱強く、焦らずに句をつみかさね るうちに生まれるものである。辛 い句が出来るものではない。一句 てこそ川柳の道に入った喜びを感 一句の積み重ねによって続けてい

女房が派手をすすめる齢になり

を感じただけである。『よそ目に た。いつも佳い句がたくさんある 類想倒れであった。 は派手に見えても火の車。などは のに、わずかに女房の句に面白さ るが、今度の句はどれも低調だっ て下さっている作家群の一人であ 謙虚な気持で入門講座へ投句し







東 野 大

生のように枯淡な悟りがもてない 受けするが、僕の場合は、 生もその点ぬかりはない風にお見 を気にするようになった。路郎先 このごろやけに人生の残り時間 路即先 ある。 の五十年はまさに一瞬、束の間で ジイドはいう

のは、まだ半熟老境のせいかもし うあわただしい生死の瞬間を僕自 ま語りいま抱き合って笑い合った れない。その一つに、軍隊時代い 人間が、数分後に昇天する、とい

んだ立派なホトケ様も実際に一人 こういう末期の一ときをもって死 五十年、夢幻の如くなり、とやる をうたいつつ踊る文句に、人生 が理由のようでもある。 身がイヤというほど体験したこと 幕は有名だが実際に一つ星でも 信長が桶狭間へ出撃する際、謡 直なところその人たちを『あゝ、

や二人はいたことだった。カンタ

ンの夢マクラとかナンカの夢なん

しか出てこない。そうしてまで寿 勿体ない』という複雑無量な言葉

き耳をたててくる。毛並がよくっ

すると、事業上の話より真剣にき

く老いたるということはむずかし かしいことではない、だが、美し 「美しく死ぬということはむず

レだけは死なん」

「まだまだ、他人は死んでもオ

のである。特攻機に乗る若者たち いためには、敦盛の如く紅顔可憐 サトリの姿をよみ、きくたびに正 の痛苦にみちたムリなあきらめで なぞは毛頭念とうにはうかばない だが、そんな花のツボミで死の影 い。こんなぶざまなことにならな なうちにみまからねばなるまい。

ていう中国のコトワザ通り、人生 歳を出たばかりで十幾度の戦闘に 命をちぢめさす戦争が憎い。三十 う事態にあいながらも僕自身は 参加し、何度ももうダメだ、とい

甚だしい。 で、いま考えるとアテすっぽうも しか自分の敷いはなかったわけ と信じ抜いた。そういう信じ方

仰せの如く老醜は鼻もちならな

る恐怖感は想像以上に根強い。何 当たっている立場上、主な対人関 気なく死に損いの話でも僕が口に 産に恵まれているので、死に対す こういう人たちは総じて地位と財 係は大抵が年輩の社長、重役連だ。 な人達と会う。経済雑誌の編集に ところで商売柄今の僕はいろん

派手な娘が話題さらった同窓会

生きて来たと言える。 "披露宴ケ るので同調出来なかった。 チッて派手なハネムーン』の句 は、嘲けりの気持が浮き出してい 同窓会を着想したのでこの句は

選挙戦派手な種蒔き実もならず

派手好み打ち上げ花火のそれの

たしかに一皮脱げた感じがするの 判るのだが、表現が適切でない。 迷いというかそうしたことがらが 手にする親の示威』は句意はよく いし佳いと思う。『左前の式を派 である。この句にしても観点が高 大分落着いて来たように思われる 此の舌も派手に吸われた過去を 作句についての悩みというか、 砂

の句を生み出しているのである。 ことによって、そうした高い境地 ものである。この作者は努力する が、仲々そんな境地にはなり難い 作句する時は無念無想という

うて其の足質屋行き』 などは作者 せる句であるから心してほしいと が思っている以上に嫌悪感を抱か してほしいと思う。 着想を拡げるということに苦心 ″派手な事言

焼け出されの方が派手なる同居

川柳雜誌社特製

投句用 柳

箋

送料(一冊分)二〇円一冊(五〇枚)三〇円

も老いにけり。などは佳いと思っ 露天風呂四十女の派手に脱ぐ

書で『ロシャ可愛やウラーの派手

ドンコサックコーラスの前

せられて、川柳から離れられなく いる老練な作家である。川柳に駐 いつも立派な句を見せて頂いて 若く着る顔を鏡に逆らわれ

娘の衣装夢よも一度節分会

風呂』の句などは思い切った表現

なった、いい作家である。『露天

で住作である。

打って出る底意か派手に金を撒

礼な言葉のある点は御了承願いた く得難い柳友であり、感謝してい る。これで終わりたいと思うが失 て、いつも鋭い批評を聞かして頂 ベテラン作家群の一人であっ

次回研究題「あくび」五句以内 《切 三月三十日 大阪府南河内郡美原町丹 上四〇四

水 白 柳

にしたい、というほどの執心ぶり すら求めてその国力を割いても手 にある人もいた。 始皇が不老長生の仙薬をひた

どそのことに対する関心はつよ

てA級どころの頂点にいる人物は

マンで財界で奇才がりをうたわれ 市村清=コノ社長は、アイデァ

「若い処女とキッスすることが

ねにこの様式を行なう長生の方法

る

間際に舌がしびれるほどのキッス 化防止に大変卓効があるというの というのがその瞬間分泌され、老 である。この話をきいて毎朝出勤 若返りのヒケッだ」 といっている。唾液にパロチン そんなにキキメがあるとは思え 元気だそうだ。モトデなしに 子どころかムシロも破るとエライ たこの効用で"太陽の季節"の障 があるそうだが、この重役氏はま

いすると若い二号さんかもしれな しくはない。 るとしればどしどし実行に移すに いずれにしても無害で効能あ 相手は女房というのだが、つ る。僕には三人の娘たちがいる。 いずれも十代でそのヒチヒチした つの方法を秘かに実験に移してい 発らつさはたとえようもない。そ 僕はそういう話をきく以前に一

寒くなるとマタの間に手を入れる 妙手?としているそうである。 のが男性諸君の通有性だが、これ 重役はニギリキンタマを若返りの またある経済誌には住友銀行の のは、 らであろう。湯の表面をすかして こで彼女らをまず風呂に入れる。 風呂が清潔な芳香をたたえている そのつぎに僕が入る。そのときの

ることによりとり戻すといってい は本能的なものである。つまりキ ることで"頭脳の明快さ』をニギ にその生態は顕著である。 ンタマが伸縮するのは精子保存の ため一定温度を必要とするから る。中国にも「掬弄」といって、つ 能を彼は一段と積極的に作用化す 冬など風呂の入り際と出た時 その本 みると、ダシ充分なコンソメスー それは有効ホルモンとみた。僕は トクトクと躍動するのを覚え それにトップリと首までひたると プをみる如く、湯の面には上質 たそれが五体の血液を浄化し き、皮下脂肪を通じて吸収し 泌物さえ浮遊している。明らかに のてんぷらあぶらの如き粒々の分

間二千円でロートル連を入れたら 儲かるぜし 名ホルモン風呂と称し一分

の度合いが薄い点は残念であ ない、ちとオーバーなので信用 囲に坐らせ、その新鮮な体温のホ てやまないのである。 伊藤博文は晩年十代の舞妓を問

をして出てくるとホントに若返っ

という重役も出てきたそう

る。

わが娘であり処女であるか ことも若返りの一つの方法ではア ある。こう自らを威張ってみせる ルまいか で妓に囲まれ大いにしゃべれ」と 五島慶太も「七十歳になれば待合 きよりはるかに気のきいた知恵が なご連中の愚にもつかない思いつ はたまらない。 中とわれわれはいっしよにされて いっているけれども、こんなご連 テリの中で酒を飲んだというし、 われわれにはこん

路郎先生の喜寿・金婚の 祝賀について

お知らせとお

りましたところ本春に至り路 全川柳人ご賛同の下に一大盛 郎師から 典を挙行する運びになってお 以来慎重な企てをととのえ、 ては本会が主体となって昨秋 の喜寿・金婚祝賀行事につい 等の恩師である麻生路郎先生 日本柳壇の巨匠であり、 我

と僕は気安い友人たちに推奨 到底そのご厚意にお応えすると るが、目下自分の健康状態では りしたい。 とがむずかしいと思うからお断 諸君のご厚意は衷心から感謝す

揮毫についてご諒承を頂きま 頂く行事として左記企画のご 添うため我々の祝意をうけて で、同時に先生のお気持ちに 生のお身体に障りのない範囲 員会を開催いたしまして、 と固辞されましたので、本会 した次第でございます。 ではその前後策につき数回役 ご承知の通り先生はご高齢

ンスではないかと存じますの べき家宝を得る、得難きチャ 後のご揮毫となるやを思 とではありますが、これが最 のことでもあり、 我等川柳人として受蔵 願わないこ 5

昭和三十九年六月吉 申しあげます。 加をお申し込みの程をお願 111 何卒この機を遁さずご参

柳不朽洞会 常任理事

春巢

代表 若本多人志 松江 西尾 川村 好郎 梅里

麻生路郎先生の

作品頒布

作品 頒布期間 考えまして、お申し込み順に六カ 額につきましては常任委員会に於 参加者より、喜寿・金婚お祝金を 揮毫料――不要とし、お申し込み な規定をお知らせいたします。 で、お申し込み受付と同時に詳細いて各標準を定めてありますの 右相当額拠出して頂きます。この (二)色紙(三)短冊 · (一) 軸•機額 先生のご健康状態も

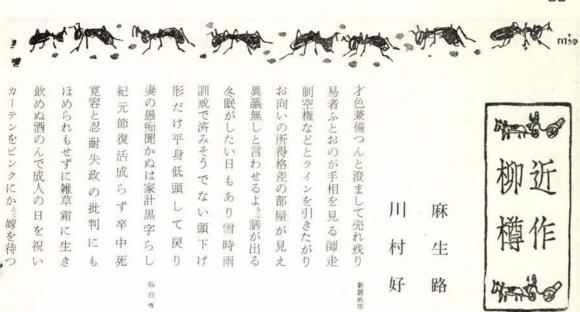
します。 西五丁目二五 大阪市住吉区万代

月以内とし

い、昭和四十年三月迄と

申込所 111 柳不朽洞会

電話大阪六七一局六〇八一



工場より先に飲屋のほうが 宴会を議員 地獄からその判決に 貧乏の倖せ医者を ルバイトせしデパートに飯 抜 目 知 な 6 不服 < ぬ 泳 子 あり 等 竹原市 杉原 同 同 同 同

口説いたらすぐオーケーのあまっと 建 同 愛鳩

路郎先生侍史

水

洞 拝

瞳美 虫と沢山の持病をかかえて居りま 害、痔、リュウマチ性関節炎、水 で、慢性中耳炎や、鼻炎、胃腸障 の記事を拝しまして私流に安心し て居ります。私は生来虚弱な体質 "健康第一主義を実行して下さい 一月号の雑誌の「柳樽室」に 私もやります。

郎

選

安藤

桂仙

感覚なき左

手

蠅

0

遊

U

場

所

岡山

縣

梶川

生活のためとか 妻

0

朝

力多

え

b

同

どっちがどっき似たの大婦ともケチ

[ii]

折り鶴よお前も空を飛

CX

to

か

可 同 郎

選

から足の先までえ、とこなしやな う呼んでいます)は頭のてっぺん ア」と言われています。実際その 「お父ちゃん(嫁いでいる娘もそ

子供達に

ではなく、安らかな往生を遂げた 己流に摂生に心がけますが、それ だから能率は往年より低下してい 自分の体力に合わして居ります。 いと思っているからです。勤めも は一日でも長生きをしたい気持ち して居ります。私も寿命までは自 「そのかわり心は綺麗や」と返答 しかし私は子供達に

平野

光道

デパートを出て青空の味を抱

<

同

昔はものを思わざりけりラッパ節

同

同 [ij

豪雪のテレビ炬 燵

は

熱すぎる京都

T

同 同 [ii] 同

大久保和三郎

同 同 同 同 LÍ

微笑みに秘めた孤独を母は知 我れ病む日から友はみな去りし

n

枕辺にスタイルブック置いて病み 病む身でも倖せ我れに父母があり

カーテンを心に引いて病みつゞけ

同

へそくりも皺も白髪も殖えて春

高知果

川川

勝子

ます。一年のうち約13は休んで

[ii]

0

Ł

な

る

梅

H

和

同

[1]

つむい

て暮す心

K

靴

軽

L

同

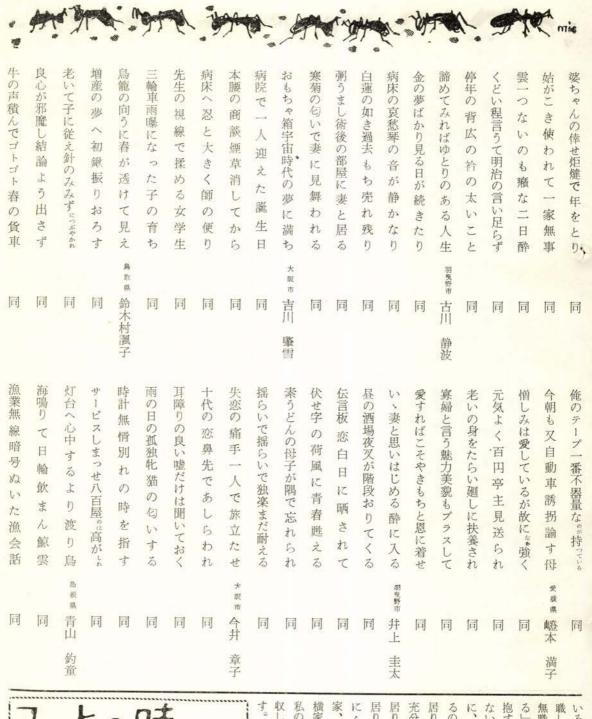
同

子の代になった主権へ宵に

寝

る

ii



コーヒの味

王中">111种

心斎橋大丸北の辻東へ



F.

TEL (271) 6 6 8 4

御集会には階上を御利用下さい

収して自分の栄養にして居りま 私の層に、 横家、それに葉隠などを読んで、 にふれ論語、 居ります。 居ります。 充分身につける様に言い聞かせて 居ります。だから子供達に道徳を るのを通り越して愛想をつかして ない子だとか、片親の子だとか 抱する事にして居ります。 る」と言うので、五十五までは辛 無職だと、就職や緑談に 職したいのですが、妻は「父親が いる勘定になります。私自身は退 道家、墨家、名家、法家、 偏見を持つ風潮に義憤を感じ 合ったところだけを吸 一昨年あたりから折り 私自身も常に心掛けて 史記、大学、 差支え 両親の 緱 儒

9	*	**	1	1.0	91	No.	1	94		***************************************	T.	TA	***	EL.	· do	7	1.	9	M	e.	YFNG
太々神楽少し柏手派手に打ち	日めくりの厚さへ夢をかけて生き	長距離でパパを呼び出す嬉しい日	失恋を別に気にしてない自信	鍵っ子は時計の針が気にかゝり	掌にあまる思慕よほのかにぬくきだっ	雪しんしん読経の声が憎くらしい	農夫と談ず政治に向いた猪口をな	胃にしみる酒美しき童べ歌	ほろにがい酒おもいでを飲み干。	嘘ついた鏡の中の目が濁り	貧しさがへつらうことをもう教え	大物の汚職は証拠不十分	お役所は予算が無いでケリがつき	適令期逃して本腰入れ始め	倖せは吹雪にストーブ が真ッ赤	パパになる子に物足らぬものばな	肝臓がさっぱりしてる金詰り	産んだ責任へ孫曽孫までたかり	石減ったライターに似た老を知る	もやい網ゆるんでからが唄になり	潮の香を大きく吸うて祈る漁
同	同	同	同	見島市伊丹柳瓢子	同	同	同	同	兵庫県 常岡 孝風	同	同	同	同	大阪府 河本 雪男	同	同	同	同	青森県 岩淵 一星	同	司
人波に賽銭箱を拝まされ	母さんをサンタとにらんだ子のねだり	あの二人恋している目の動き	倖せは親子揃うて除夜の鐘	お屠蘇にも酔えず重病患者来る	姑は留守らしジャズが鳴りひゞき	そろそろと歯と目に老いがしのでき	長生きをする気保険に入れと妻	墜落の噂元旦の霧	寒ざむと梅一輪が咲いてくれ	老夫婦飾る餅だけ買ってくる	嫌怠期金魚の水の濁ってる。	人の世の情けを旅に病んで知り	波の音全治する日はまだ遙か	下心見すかされる苦笑い	裏表なき人生の足袋はだし	常識の外に演技も要る世相	この雪を除雪する人滑る人	信用をしてるしてるとしても居ず	円満な相ですとまず易者ほめ	肩こらぬ同志で飲んですぐまわり	肩書がついて名刺を出した がり
同	同	同	大阪市宮尾あいき	同	同	同	香川県 三井 酔夢	同	同	同		同	同	间	同	玉島市井上 旭峯	同	同	同	同	守口市 村田 瓢太
-二月十五	生のご自愛とご健勝をお祈り申し	が寒さはまだ!	が、心は豊かです。暦の上では春明在の私は肉体的には貧弱です	が強烈に私に迫って来ます。古くとも僕には仁義礼智信	不朽の名句	4、は人間としての窮極の目標と	居ります。	3、は人間として行なわなければい聞かして居ります。	ての最大の義務だ」と常々言	こ心配をかけない事が子としります。私は子供達に、「親	2、は道徳の基本観念と解して居ります。	い道義への心構えと解して居	ます。だから私は死も恐れなば、死よりも生を望むと思い	しも正常な感覚を持って居れ	されたが、本来は争いの言葉	1、は戦時中(一億玉砕)に利用釈して居ります。	です。これらを私流に次の様に解れの四つは私の最も好きな言葉	可なり	4、朝に道を聞かば夕に死すとも3、大義親を滅す		1、武士道というは死ぬ事と見つ

*	//	A B		- (A	91	M	*	200	1		1	rive	*	W.	, de	A A	1.	9	te	M m	ino
腹立たし雲悠然と動いてる	クリスチャンと言う男にだまされる	目玉焼つゞけて妻のるすに耐え	親友に昔に触れず励まされ	くつろいでなるか余生へ胸を張り	さ、やかな料理に菊の香が流れ	我が恋に偽りはなし日記閉ず	堪え難き思慕寒月冴え渡る	目覚めれば孤独が重くのしか、り	いんぎんに四五人で来たる附だった	陳情団東京観たいのもまじり	禁煙は出来たが盃の手があがり	風雪に耐えて余生にある丸味	好きだとは言えぬ職場の電話口	正月にどこへ行くのぞ税実殿	あら齢がわかるかしらと自惚れて	保釈金あんな男にまだ未練	占い機夫婦なにかもの足らず	督促状笑止千万様で来る	季節風ねこ背目立たぬようになり	何気ない話は淋しい瞳とわかり	ふと箸おいて舌代確かめる
同	八戸市川村	同	同	同	★ 市 水粉	同	同	同	鳥取市近藤	同	同	同	松江市内藤	同	同	同	倉敷市 水谷 公	同	同	同	竹原市三宅紀世美
	映輝				千翁				秋星				喜夫				谷水				美
恩給の身で政府をこきおろし	脱税をしていて二号など囲い	持たぬ身のひがみが好かとと言う	年の暮信号灯のもどかしさ	老妻に煎じぐすりを頼まれる	台所で洗う姑の歌謡曲	時経てば濁った水も澄んでくる	一言もわからず秋田県通過	人間の出来より地位がものを言い	不景気をお年玉から子は悟り	斯う言えばあ、言う親と子の批判	初詣食べた残りの市場券	お互いの親馬鹿笑うて頼まれる	達者らし賀正の筆も衰えず	不景気な正月と知る鹿の腹	腰曲る母へいたわり惜しみなく	調書用のハンコで借用証が出来	肥えて来た娘を褒めて気を損こね	いさいかは酔ってるらしい長話	成人式母は晴着が気にかいり	や、こしい計算で恩給少し増え	紹介に一人をおいてとはぶかれる
同	同	宮崎市野	同		大阪市山	同	同	石川県	同		大阪市中	同	同	奈良市村	同	同	宿屯市渡	同	同	兵庫県 斎藤	同
11-17	11-0	野口卯之助	11-9	11-13	田李鳥	11-11	1.7	大山 雅城	1.0	,72	川滋雀	1.0	1.4	村上 春己			渡辺伊津志			藤たけお	

説の凡てが文学だと言うのではな

◇川柳作家でなくて俳句作家、で

事であって、俳句の、川柳の、小

其の個々の作品について言われる だと言われている。それは何れも ものである。

も酸素の助けなしでは、光らない

言うものはあり得ない。ほたるで

◇自分一人丈で完成出来る人格と

志 寸 言

柳

本多 柳

らぬ事は書かん事だ。

も、男の友情は書けない筈だ。知 書けまい。吉屋信子さんの文才で

◇谷崎さんのペンでも女の世界は

志

心斉橋筋大丸前 電話回三三四四番

	9	nd.	为	1		97	M	· N	90	一個	. " 4	97	TK	学	W.	· de	4	1	•	*	C	mio
超過した家計亭主のわざにされ	空箱をまだ残す気かはたきかけ	第二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	書崩れ呼ぶ銃击	寒むがりの暑がりですよと母素直	左遷だと近所の方が知っており	交叉点嫁荷についく霊柩車	思案する間もなし盲腸手術され	社屋だけ残り登記簿名が変り	テレビ皆郷里の雪害無惨に出	二千円のパーマどう寝るのか三ヶ日	オールドミスの涙を久し振っ見る	女客俺なら五分ですむ話	昇進へ妻もほんのり酔うてくれ	貰うてはならぬ手土産子があける	手術日が一日延びてよう喋り	祖母なぜか古鏡台を捨てさせず	古雑誌集めて善意の金とする	初めてのデートで食べたソバの味	乗車してうちのガス栓気にか、り	公立は家風に合わんと負けおしみ	窓口に警備がついて年も暮れ	好かんのに献盃にゆくエチケット
湖咋市 三宅	同	セス	K	同	七尾市松高	[ii]	神戸市吉田	同	大阪市藤富	同	大阪市西本	同	島井県星狸	同	同	出雲市馬路	同	同	出無事藤間	同	同	羽曳野市井谷みつお
ろ亭		古人	胡人		秀峰		隆史		淀月		保夫		侑正			舟			由起			つお
妻のくせ覚えて世帯まるくゆき	今年こそと言い暮しつ、押しづき	新しい畳も父の喜寿を待ち	成人の日婚約やっと親ゆるし	新年の挨拶かねたコマーシャル	会合がすき焼になりよう喋り	予算案倒産ブームへ容赦せず	手術開始そして水平のベット	薬所へもやっぱり正月来てました	ラッシュアワー駅の生花にご笑顔	寄り道はノーよと愛の受話機置き	豊作と酔うてるすき。は他のイモチ	ブラウン管凍りつきそな雪が降り	見渡せば祭日休めぬ額が乗り	ヂョンソンのテストウイナムとの数く	運を天にまかせ新春胸を張り	頭から足まで月賦で式を挙げ	初詣恐わ恐わみくじひいてみる	成人の若さうらやまし美がこぼれ	野良猫の生活力に魚盗られ	母親の無力のま、をいたわられ	送別の宴へ戻が出てくれず	すぐはげる嘘と知りつ、聞いて言
練早市	出雲市	出雲市	世史市	当实市	京都市	香川県	兵犀県	款市	表 ,木 市	大 駅 市	生 岡 市	松原市	河内長野市	シ カ ゴ 市	松江市		金沢市		岡山県		岡山県	
大崎	影山	米山	林	高野	白崎	伊藤	磯野	和泉	高木繁	和田	谷本鈍愚坊	守屋	森本黒天子	前田	岡崎	同	根上	间	牛房	同	阿部	同
筆 染	清	三子	步	千鶴	正男	歌子	与志	松風	繁太郎	痴亭	愚坊	万竿	※天子	躾	祥月		杏花		譲士		良江	

の外の錯覚である。 あることを自慢する人がある。俳 を自嘲する人がある。何れも以て 句作家でなくて川柳作家である事

から聞くと信じたくないものだ。 口から聞くと信じるが、本人の口 い。其の人の偉いことを第三者の ◇人間は結構天の邪気なものらし 一名古屋弁—

東

野

大八

の中 あはおよしなさいで方言の特質は 名言屋弁中の圧巻である。よしや とろくさいはアホらしいの意、 とろくさい話よしやあと湯気

間の肌合いが溢れている。 川柳ではできのいい句である。名 れないきしめんの味がある。方言 ようなのがある。古い土地柄の人 古屋弁で秀逸なのを選るとつぎの が、地元連中にとってはこたえら いたもので、トロくさいがミソだ わく長島温泉のP・R誌に出て この句は最近新興温泉ブームに

ね っさま(奥様)あのナモ(あの す(だます)すたこく(困る)ご る)だちかん(だめだ)ちょらか (久しぶり)いこいとる(てれて おそがい(こわい)やっとかめ

川柳と風俗 (2)

奥 津 啓 朗

売

遺法薬、其大効は著し、用ゐて効 本無比なる家伝にて、徳本大臣の 拡むべし、生盛薬館の制剤は、日 「勇めや~~諸共に、国家の為に

に見られたという。

いい役者でしたと話す絵双紙屋

角力場の絵は首ばかりゴタく

選

恋大長

絵草紙屋隅から隅へぶら下る

葭 乃

楽好子

生

絵空事過ぎるは海女の預型

明治時代にはまだ市中到るところ き、江戸気分を漂わした店構えが 紙類と書いた行燈型の看板を置 懸けた絵双紙屋、表には地本絵型 武者絵や新狂言の似顔絵を列べて

> は姿を消した。 るものもあらわれて明治も末年に われて、中頃からボツボツ廃業す

江戸以来の東みやげ、極彩色の

双

薬館であった。

殊更に手織木綿の薬売

たが、もっとも対立したのは無二

その他にも類似のものが現われ

飯事の窓へ置いてく薬売

生盛薬館の薬売りは軍服姿で、

人だかり武術を見せる薬売

片足を看板にする薬売

とを追い広告の絵紙をもらった。 から「オーニ」が来たと言ってあ で遊ぶものばかりでなく、家の中

薬売絵札を撤ひて売附る

楽

野掛道癪を助ける薬売り

すばらい

愛嬌に容態を聞く薬売

薬売村では医者の真似もする

薬売午睡の窓を手風琴 白山人 子

風琴で薬売り来る山手町

薬売袋の裏を引き合せ

種ばかり入れてかきます薬売

蝶伴

歌って歩いたので、子供等は戸外 能知り給へ、オーニ」と軍歌調に

人替が済むと薬屋又旅へ 紅太郎

薬売脈まで取って匙を取り

すき焼

市場くるく、結局すき焼すると決め 今日はすき焼湯気が部屋中和ませる すき焼へ母はラストの煮えっまり すき焼が一人揃わぬま ま終 すき焼の許可が出た日の聴診器 ひとりぐらしもすき焼にする寒さ すき焼へやっぱり校歌ったい出し すき焼へ不意のお客も割込ませ すき焼は週に一度の共稼ぎ すき焼の生椎茸に老の箸 すき焼のもてなし借金言いそびれ すき焼の匂い犬小屋にもとどき 同 清 同 同 同 同 きさろ了 同 同同 同 子 栄

共稼ぎすき焼の用意手際よく すき焼パーティ青い目もまじり すき焼のにえる間もなき子沢山 すき焼のそばでお茶漬だかり食べ すき焼に書生気分がまだぬけず すき焼の床に飾った優勝雄 リバイバルの歌も流れるすき焼屋 寒いから沖すきにして手をはぶき いける口鍋の肉には箸つけず すき焼の世話はかりして猪口が冷え 肉とねぎさけて飲む気がやって来る すき焼にうちょしましょう市場籠 すき焼の匂い給料日の みさ子 同 同 花 阿同同 同同 徳同同 梢 7

> 若いすきあっと言う間に肉はなし 百グラムだけのすきゃき割込まれ 値上りの肉へ野菜が多過ぎる すき焼で肉をたのんだババを待ち すき焼のクラス会にも訪問着 すき焼の味覚を二世ほめていた すき焼に恩師も共に箸を入れ すき焼の兄弟喧嘩を母叱り トメ子 同 美 勝 同 千同 同 代 子 夏

次回題「花吹雪」 三月末

井戸町二三山川医院山川阿茶理事長宛に 員に限る。入会希望者は大阪市南区ニッ 金泥集への投句は川雑婦人友の会の会

すき焼で戦時中の話が出

同

忘年会かばんに葱を入れて出る すき焼を逃げて茶漬の仲間入り すき焼の肉もり分ける子沢山 すき焼の匂いただよい街は暮れ 周 同 同 同 春 栄 甫 申込まれたし。会則をお知らせする。 (電話大阪二一一局四五四三)

には双六、千代紙、切組画などが 錦絵が廃れて石版刷になった頃 泥

絵草紙屋松の宵寝を起される

主となった。

守っ子の叱られて出る絵草紙屋 絮

られたり、絵葉書の流行などに追 少年雑誌の附録に双六等がつけ

共稼ぎすき焼にきめ西

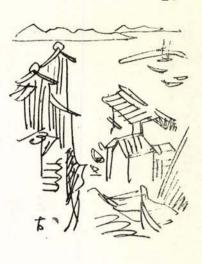
東

同 夢 皆んな定時に帰って来てるすき焼日

すき焼の肉をあわてる不意の客

すき焼が煮つまり商談まとまらず

酔 同 同



11月川柳と紋章

阿達義

雄

紋章吟柳多留における安永期の

明和川柳点の一般風俗に関する紋章吟はその数も少なかったが、その中でも当代のその数も少なかったが、その中でも当代の大安価な庶民の賭物たる紋つけもその頃ち、安価な庶民の賭物たる紋つけもその頃ち、安価な庶民の財物たる独特のとして作句の対象にされ始めたのですものとして作句の対象にされ始めたのであった。

大紋は殿中の大名、それに歌舞伎役者等句の代りに大紋の句が目立っている。相のそれに比し、視野が広くなり、小紋の相のそれに比し、視野が広くなり、小紋のの代りに大紋の句が目立っている。

大紋は曖中の大名、それに歌舞伎役者等 ているのは三河万歳の傷の大紋である。 〇大紋を乗せる今年の渡船(一三・41) 〇大紋を乗せる今年の渡船(一三・41)

- 三河万才も風折鳥帽子や大紋の直

ことで、この様な言葉の洒落を擬人名で現在の句に注意されることは、万歳の正体右の句に注意されることは、万歳の正体を万右衛門という擬人名語で表現している垂を脱ぐと、田舎の何右衛門と言

わすことは安永期から流行し始めたことで

老人に赤染衛門あげられる(一八・42) =吉原において老人客の好んで揚げるのは赤い振袖を着た振袖新造。 冬の内信濃之介を召し使い(安八・松5) =江戸では冬期間の労働に出稼ぎの信濃者を使った。

掛乞いの言ひ訳川瀬喜内する

一様乞いに為替が来ないので支払いぬ と言った。 と言った。

○丸一をやめて倹約で角兵衛なり

○はづかしさ丸一へ唾はつに吐き

ったからの譬喩。 に、渡し金を載せた形が○の様であ に、渡し金を載せた形が○の様であ

○紋付けをみんな付けたで取りは取りも見えた「紋付け」の句も二句発見され、なっているのが見られよう。なお、明和になっているのが見られよう。なお、明和に後の句は、この一引両紋を意識した譬喩と

○紋付けに贔屓を省き懲が知れ

又、安永期になって、廓に関係ある紋章の紋にもつけられない。○一八・31)○一八・31)○一八・31)

○中宿へ来ると衣に紋をつけ吟も現われて来た。

○先キを払って金紋の煙草盆(一八・2)少し変った句として、式亭三馬の『浮世少し変った句として、式亭三馬の『浮世の先キを払って金紋の煙草盆(一四・26)

ける若い娘を

○紋~の障子の前を娘かけ

30

という写実句が見られる。

要するに、川柳 点堕落期たる安永の一要するに、川柳 点堕落期たる安永の一要がには擬人名にかけ、言葉の洒落をい務張句は見られないということになるでい務張句は見られないということになるであろう。

「町人絞」

「柳多留」の安永句に現われてくる町人 放は、三升・沢潟・四ツ目・紅葉だけであ り、この外に日連宗の橘の句が見られる。 先ず三升紋を打った看板を出して、江戸 の誇たる団十郎の三升紋によって商売の繁 昌を考えた通旅籠町の三升屋五郎兵衛、神 昌を考えた通旅籠町の三升屋五郎兵衛、神

○三升屋のおろしへ大はまだござる

―もっと大きな艾があるというのであ

次は、家紋の沢潟を商標とし、沢潟の紋次は、家紋の沢潟を商標とし、沢潟の紋で、本郷四丁目角の伊勢屋市兵衛店があった。

○沢潟を神農横ににらめつけ

□神農とは兼康店の屋根の上に看板と

句が特に目立ち、「未摘花」だけでなく 性的なものが興味を持たれ、四つ目屋の せていないが、何と言っても川柳点では 柳多留」にも一句採られている。 どういうものか歌舞伎役者は殆ど顔を見

〇四ツ目があり買い憎い薬なり

〇四ツ目屋の女房わっちが受け合ひさ 四ツ目屋の店先には四つ目の結結 紋と大きく「長命丸」と書いた行燈 を掛けていたので、 (一九・4)

- 薬の効能受け合う。 (末二・29)

○もがく事神の如しと四ッ目言ひ (末二・19)

大尾

〇四ツ目屋をつけて夜這ひは餅につき

(末二・1)

=これは「大尾」(破礼)と記されてい

〇床はい、はず四つ目屋の女郎なり (末四・10)

≕吉原京町一丁目に四つ目屋善蔵とい う妓楼があった。但し、右の句は駄

は余り際どい句を採らなかったことが知ら な句が詠まれていたことや、 右を見ると、当時の川柳点には相当卑猥 「柳多留」に

で高尾の紋を紅葉にしたものと思うが、安 水期では、この紅葉紋の名で仙台高尾も榊 高雄が紅葉の名所であったから、三浦屋

原高尾も詠まれている故に判別の要があ

先ず仙台高尾については ○錦木を紅葉に立てる無駄な事

||陸奥の錦木をいくら高尾の所に立て

○豆腐屋が紅葉をつける訳もあり

○縁のない白い紅葉の世話になり =江戸時代の豆腐の表面には紅葉の印 を浮彫の様に刻していた。

―仙台侯が高尾に通っていた頃、高屋 腐屋に逃げ込んだと伝えられて れ者の浮世渡平が途中で侯を殺害 の愛人島田重三郎に頼まれたあぶ しようとしたので、侯は京橋の豆

現わした句としては、 を紅葉で現わし、榊原侯を車(源氏車)で ことは注意すべきである。なお、榊原高屋 いて、俳句の季語的な作用をもつに至った 高尾事件を連想させる因子となって了って 右三句、いずれも「紅葉」という語は、

○紅葉狩車はわきへおしやられ 38

えた「紅葉狩済んで車の所替」の類型化し この句は、既に明和二年万句合礼印に見 姫路から高田へ転封 高尾を身請けした、めに、 榊原家は

四。30 三 20

(一六・19)

因するであろうが、この頃の風俗や川柳子 を合わせた句よりも多いということであっ の興味の存する処を語るものであり、即ち 仙台高尾・榊原高屋を詠んだ句の中の紅葉 五句もあって川柳点の好題目となっていた て気づくことは、この中の四目結の句数が であって、 の句を調べてみると、その推移は次の様 柳評万句合に詠まれている四つ目屋関係 今、四ツ目紋という限定を加えないで、宝 ツ目薬等のすべてを含んでいることにも起 て、これは四つ目の屋号・主人・女房・四 安永期の町人紋

される句であり、一句の中に二つの紋章を 示唆する語が詠まれている。

んだ一句も、この頃作られた。 とを、その寺紋の「井筒に橘」にかけて詠 で日蓮上人の忌日に護摩の修法を行なうこ 町人紋とは言われないが、日蓮宗の寺院

尤も句としては、別に面白味もない句で 〇十月の護摩橋の中でたき(一八・12)

七年から寛政元年に至る三十三年間の川 (商標も含む)の句を見

		四ツ目紋の句	四ッ目屋 関係の句
宝	曆	0	4
明	和	2	11
安	永	5	19
天	明	11	37
寬	政	2	2
1961	+	20	73

○寛政は寛政元年万句合だけである。

た句であることにさえ気付けば容易に氷解

数の上昇期とが偶然にも一致していること 関係の句も多かったことや、安永から天明 知られる様に思われる。 は、四つ目吟の一ケースを抽出検討しても が知られる。従って、川柳点堕落期の句風 堕落の傾向を辿った時代と、これらの句の に入るとその数が更に激増して、川柳点が 「四つ目」という言葉の制約外の四つ目屋

るからである。 だけでなく、なお、その暗黒面を暴いてお 四つ目は単に風俗に関与して詠まれている だけでなく、武家紋がその性質上当代の風 同様に数的狂態化の様が具体的に見られる 北条三鱗・真田六連銭・細川九曜星などと 俗を詠み込むことの少なかったのに反し、 というのは、この句にあっては武家紋の

筆者·新潟大学教授 続く)



THERESAME in) The state of the state of



]1] 巣 選

北 春

新居浜市 小 林 孝 Œ

蛍の光ガイドも淋しい顔になり

弱い子が居て庭中へクコ植える

親切にされて女は身構える スキー靴履けば雪など寒くなし

時計の針のような男で出世せず

金沢市 根 Ŀ 杏 花

ざあますもうまくこなして団地馴れ

肝臓も妻も許したトン祝う

夢にまでなやませられて左前 内弁慶又泣かされて戻って来

景気よく不渡り出して雲がくれ 今治市 月 原

宵

明

花に埋まり人間よさようなら 安らかな寝息蓄えなけれども

熱帯魚終日恋にたわむれる

交通地獄さながらピカソの如くなり

道

雪でダイヤ乱れ駅弁売切れる

菊作る決意空しく寝正月

交通マヒまがれば有料駐車場

表彰式にまでもアクセサリーの妻

岡山県

本田恵 =

障子また切り張りさせて孫育つ

墨痕のかすれようにも出来不出来

皺くちゃの顔皺くちゃにして達者

ついそこへ来たのでなどと嘘をつき

七尾市 松 高 秀 峰

吹雪には弱い国鉄悲鳴あげ

三ヶ日こぬかイワシのおいしくて 毒舌をたたける仲で年酒酌む

新参は咳払いまで気を使い

大阪市 森 JII す 2 n

仙台市 平. 野 光

朗

帖面を合わす身銭でとぶ残業

分別もなく金欠の昼寝する

奈良県 草 深 酔

指折って数え停年淋しがり 三十年事務屋で背中丸くなり

門づけの御詠歌も洋服着た女

柏原市 綿 木 惣

コマーシャル通り二台にしたテレビ 明

代表で組合さんと呼び出され

今日の列記念切手と教えられ

海原へ恋の樒を捨てて来る

忘れねばならない人の手のぬくみ

逢わざると誓いし人と川をみる 鳥取県 鈴 木 村 諷

子

サロンパスに無理をするなとなだめられ

せん抜きとチップを入れる帯締めて

いい夢を見ろよ保育所更けてゆく 京都市 室井八

九

7

すす掃きの掘出しものに缶ビール

失業部落テレビ持たざるはなし 駅弁殻勇ましく蹴るツケ睫毛

岡山県 永 宗 宗 義

円満解決泣く者は泣かしとき

升

JOHN DE TOUR DE LES TOURS DE LES

五十年かかった白髪だ染めずおこ 雪になったらしコンロの芯を出し 蟻地獄の様にサラリーマンの果て

大阪市

今

西

章

雅

井 酔 夢 しあわせは君を忘れて生きること

香川県三

今治市 長 野 文

庫.

今に見ろうっちゃりという事もある

倉吉市

弘

朗

仕方なくうどんが好きになる胃弱

奥さんの衣裳見に行くお見送り 借金が無いだけましのお正月

大阪市

和

痴

rir;

云い勝ってその後敬遠組になり

禿白髪忘れて校歌呶鳴り合い

大胆な事も新人だから出来

ふる雪にくずれる思慕を冷やしたく

倉敷市

水

粉

千

翁

兵庫県

常

岡

孝

風

女秘書社長夫人を見返す眼

奈良市

村

Ŀ

春

E

霜柱踏めば失意の音となり

コーヒからビールに変り恋佳境

熊本県

働

芳

仙

一攫千金利殖の本に見当らず 倒産も知らず良縁もって来る もうすでに来年がいる暮の街

盃がぐるり廻って唄になり

黒潮を得し冬雲にとびの舞い 手を上げただけの別れよ海青し

大阪市 西 本 保 夫

反省のポストへアルサロの招待状 旧姓の質状オールドミスへ挑戦す

羽昨市 Ξ 宅 3

进

吹雪いてる夜は戸締り厳にする 方円の器に入らず嫌やがられ

子の欲しい女露天風呂長湯する 神戸市 田

吉

隆

史

指名した女と握手冷たい手

パイの音へ女房ツノを出してねる

松江市

楽

鶴

丸

牛小屋を覗けば牛も寝正月

貝の蓋なまじ開いたための恨

鳥取市

近

藤

秋

担

縦に振る首があるから苦労する 後にも目があり人をそらさない 押入れに金庫が据わる村役場

玉島市

井

Ŀ

旭

坐

無為徒食まんずまんずの年の暮 忘年会ぶたまんの湯気冷え帰る 忘年会酔眼景気を打診する

守口市 橋 雅 巢

金の垢舐めて脹らむ高利貸

着ぶくれも一役買うているラッシュ

宿毛市 渡 辺 伊 津 志

マッチする手付きに過去のある女

宮崎市

野

П

加

之

助

例えばの話しが皮肉にもとられ

働き手陽を一杯に健康美 京都市 Ĥ 崎 Œ 男

大阪なぶしる 書 一時日本 紙 圃 電南七二、七三十 12 短 II 册

を



(2)

鳥の名、幾刻ぐらい、鳥の智性、倒のこ あたたは鳥を倒つたことがありますか。 と、その他興味のあるお話をというアン ケートに答えられたものー。

本当に可愛いものでした。其の やると皆の肩に留まり手の中の餌 む時頭を上にあげません。小鳩も 飲みます、鳩は小鳥の様に水を飲 をつきまぜて作ります。水もよく 鳩の餌はトウモロコシ、栗、貝がら り大きな鳩の子が生まれました。 た。其内に、赤はだかの頭ばっか くわかりませんが抱いて居りまし 頭をくちばしでつ、いて羽根をす を食べ、口の中のつばを飲んだり、 きます。室の中で子鳩を遊ばせて れとも一ヵ月ぐらいだったか、よ 玉子は二箇、二十日ぐらいか、そ 相ないじめかたでした。其の内に した。其の中にも嫌な雌が来ると あ」と言って皆を笑わせて居りま 「こいつ彼女がずいぶんいるな 一生懸命巣を作ってやりました。 羽が巣につく様になり、次男も カ月たつと親鳩が外へつれて行 かりぬいてしまい、本当に可哀

り、可愛がられて居りました。一

週間もすると、小屋から出しても

作られ、其日から我家の一員とな にさわがれ、次男の手で鳩小屋が 来るとよい事があるのよ」と子供 込んで来ました。「鳥が飛び込んで

或日突然一羽のまよい鳩が飛び

女

鳩

屋をつくりました。そしてもの、 そこで出入の自由に出来る様な小 夕方にはちゃんと帰って来ます。

二週間も立った頃、余り小屋の中

らわれて、鳩はにげ子鳩は可哀相 幸を持って来る事うけあいです。 が来てくれて其の年は長男が大学 物は飼育しない事にしました。場 に死んで居りました。其後は生き ら何迄都合よくゆきました。鳥は 由に出入りが出来るので、猫にわ へ入学、三女は高校へ入学と何か

おみくじを運ぶ小鳥に養われ

が鈴を振っているのを見ている私 す。よく大丸の角でいつ迄も小鳥 この句は梅里さんの句と思いす

三羽 0 雄 田 太

うことは余り好きでない方である のだろう、そのうち三羽だけが生 もなく、又買って来ては死なしし 五円)で買って米ては、ボール箱 かえったばかりのヒョコを(一羽 き残ったので仕方なく飼うことに ていたが、余程運の強い奴だった が、子供等が、小さい時分卵から に入れて飼っては死なし、性こり 元来何によらず、生きものを飼

ととて臭いこと夥しい。百姓家 と何分狭い庭の片隅の鶏小屋のこ る。それに食べるものもよく食 角ボツボットサカの生えるように い、養もたくさんするようになる なると可愛さなどは全然なくな 一緒で、鶏もヒョコのうちは兎も 犬でも小犬のうちは可愛いのと

イ

う様は浅ましい限りである。 さは全く情けない有様である。も 四方へまき散らしながら、取り合 ものを、相手をかきわけ踏みつけ っと静かに食べたらよかりそうな にものを食べる時のあのガツガツ う人になつかないのだろう。それ とは知らないが、どうして鶏はこ も馬鹿にならない。ほかの鳥のこ サラリーマン生活では仲々えさ代 だろうが、野菜一つ作っていない ならえさの材料にもこと欠かない

の中に納まってしまった。 わと交換して貰ってみんなのお腹 年の暮に鳥屋へ持ってゆき、かし に延ばしていたが、とうとうその 度子供等の反対に会い一日延ばし て仕舞おうかと思ったが、その都 し、世話がやけるので何度か殺し 卵を生むわけでなく、楽しみもな それに三羽とも雄であったから

が内心余り良い気はしなかった。 ということに表向きはしておいた 響も、どうかと考え、人にあげた め殺す勇気もなく、子供等への影 これにこりて以後もう生き物は 流石に自分で世話したものをし

たが……。 浮かんだ句を一句、作者は失念し 最後に余り名句ではないが頭に

飼わないことにしている。

結局は母が世話する鳥を飼い ンコの巣引

西 村 句 楽 坊

月の輪インコと七色インコの巣

有り、インコを飼うのに好条件で された事が有りました。それは今 引をして、日本で初めてだとはや ○鳥小屋は幅二間で、長さ五間。 老木で森になって、百坪程の池も て、後ろが山で、前方三面が敷と の頃の私の方は敷地が六千坪有っ から四十五年程前の事でした。其

りにして中へ木を植え、野に居 それを二つにしきり、金網張 尺、高さ五尺の自然木に る気分が出る様な工夫をしまし で玉餌で発情をウナガシ、直径一 ○巣箱は産卵の様子が見えたの ○餌は餌胡麻2、菜種1、栗2。

金剛 上の様な穴を

つくります。

色が四個で、十四日目に孵化しま ○初めの産卵は月の輪が四個、

回はホースで水をかけることを忘 す。スコールのかわりに、日に二 で青菜と水をかかさないことで れないことです。 阿房鳥ずきでなく、青菜鳥すき

ッスをする。 こまやかで歩き廻ってキ インコ特有の夫婦の受情

わかりません。 を聞きました。月の輸は いが二十万円程だとの事 年前に七色インコーつが たと思いますが、二、三 其頃たしか二十円程だっ

れて来たのは雌ばかりで、次男が 内にいつの間に目をつけたのか自 り、これではと又大きい小屋を作 屋がせまいのでバタバタして居 と場が五羽くらい入っていて、小 がさわがしいので、のぞいて見る

まよい鳩は雄でした。そしてつ

いていかれた小鳥

とても可愛く、楽しいものである ようなものだ。でも飼ってみて、 どちらも自分から求めて飼ったの ことがわかった。 である。いわば、押し付けられた へ転任する際に置いていったもの ではない。娘聟一家が、遠く信濃 羽、セキセイ六羽飼っているが、 いま、私の家では、十姉妹二

うにしているが、仲仲手数のかか 掃など、総て私がやっている。茎 者に診てもらおうと思っている。 もす喜々と、囀りつづけている らず、愛の契りを交したり、ひね 三番いらしい、いつ見ても、キッ て、種子を播き、年中絶やさぬよ に、おもちやのような畝を作っ 無い場合が多いので、狭い庭の隅 っ葉など、市場に、適当なものが 替えはもとより、時折の鳥籠の清 だけで、誰も世話をしようとしな しいが、ただ、見ているのが好き のは、どうしたことか、いちど識 が、未だに愛の結晶に恵まれない スをしたり、ときには、人前も憚 を得ないが、セキセイのほうは、 。だから、毎朝の餌や水の入れ 家の者も、みんな小鳥は好きら 十姉妹は同性らしいから、止む

を啄みながら、何やら、話しかけ つもの雀がやって来て、こぼれ餌 今日もまた、鳥籠のそばへ、い

> 硝子窓越しにそおっと見ているの ているようだ。私はその様子を、

栖鳳の描いたかたちにとぶ雀 鳥籠の前で口笛吹いてみる 清貧に甘んじ雀のごとく痩せ

Щ

れてあったのですが、とてもよく

と歩いて来ます。長い支那籠に入 ナリヤ、文鳥、七宝、紅雀、セキ のですが、ひと頃は二百羽近い小 くて雲雀ちゃんと言えばよちよち 餌から育て、あるので人なつっこ もあります。ペットの雲雀はさし 卒なしやなっ」とからかわれた事 勝した時も朝日の社会部から「弱 げた事もあり、鳴き合わせ会に優 万才」とか「おめでとう」を申上 のお祝いにNHKから「天皇陛下 九官にはカップやメダルをもった 並な小鳥は大抵おったのです。私 リ、マメ、小マメ、セキレイ等月 セイ、頬白、十姉妹、ルリ、小ル 目白、九官、ローラカナリヤ、カ 雀、鶯、こま、あかひげ、雪雀、 が、おったのです。四十雀、小 鳥を飼って、その世話をする下男 小鳥とはすっかり縁が切れている 名鳥がおって秩父の宮様の御結婚 美しいのには魅力がありません。 は声の美しい鳥が好き。色や型の 戦後は人間の口の方に追われて

轉りが籠にこぼるゝばかりなり

う」のプロローグに出てあまりよ って一人舞台、持ち主から恨まれ く囀り、他所の鳥がだまってしま 或る正月のNHKの「大空に咀 た事がありました。 この句そのまゝだったんです。

で)先まで十分声がと、くので べるだけあって半丁位(戦前の町 鶯も体の小さい割に強い餌を喰 鳴きすぎたペットの雲雀へ風当

声の美しい鳥はすり餌のものが多 く、鳥によって餌の混合率も違 は範に小鳥をおしこむべきでな ないしなかなか面倒です。 ねばならず、夏でも青葉は切らせ い、夏は腐るので一日に二回作ら 川村博士は「ほんとうの愛鳥家 ローラカナリャは別として大抵

い」と言っておられます。 ちいちく ちいちく 翼の下の花

籠の鳥諦めたのか空を見ず

り、風呂にも入れて、 か。でも暖房もしてやり、爪も切 であってはいけないのでしょう

鷲は如露のシャワーをうれしが 春だ春だ小鳥の爪を切ってやろ

は不満でしょうかしら。 愛撫してやる人間の愛情に小鳥

小鳥と人間

ねばならない。小鳥のあの山 でくわえて引上げる。 る麻の実を欲しさに、瓶の紐を口 わえて来る。又は、釣瓶の中にあ も、生きると言う事に於いては、 一粒のおのみの為に、辻うらをく 人間も小鳥も生きる為には働か

うに、店の隅に鶯を飼って、ホー ホケキョの声をお聞かせしてい も、お客の気持ちをこわさないよ る事を聞かされる。私の経営する い方で何万円もするうぐいすのい 「男まえ」(理髪店)では少しで 又、良い声とよい節まわしの歌

家」とか呼ばれたものでした。 の先生とこ」とか「鶯の鳴いてる 「おと、の先生とこ」とか「九官

れて、髭をあたってもらいなが かしげているのである。 いるんだなァと言った風情で首を 自分のために摺り餌をして呉れて つくっていると、小鳥の方でも、 ながら私は小鳥のために摺り餌を と思っている。こんなことを考え ビスこそ、ほんとうのサービスだ る。斯うした静かで朗らかなサー 鶯の第一のファンでいらっしゃ はたまらないネと路郎先生は店の ら、不意に鶯の囀りを聞く快感 都心にある理髪店の椅子にもた

すり餌の鉢へほゝじろは首かし 柳

鴉と庭鳥

西田 子

まった。 えたが、仕舞には「おのみ」の固 が難しく飼い難いとしたものだ した。元来日本鳥はいずれも餌付 い皮をむいたもの許りになってし 家の者が拾い上げ介抱して元気に が、最初の内こそ摺り餌をこしら つけられて庭先に倒れていたのを 早春の強風に流され雨戸に叩き チュッピーのことヒワ ある。(買えば二、三百円位) 雀科に属する黄緑色の可愛い 小鳥で日本鳥季節的渡り鳥で

かなかこったものでしたが、これ をこしらへ張出した小部屋付のな 竹ヒゴをこしらえて二階建の鳥籠 んだものです。 に入れて思いつくま、に芸を仕込 「鈴ふり」、「おまわり」から始 むいた「おのみ」を餌に先ず 物好きかも知れないが、自分で

に
ぷら下げた。 いらしいのを探して来て止まり木 々京都まで出かけてよく鳴る可愛 めた。鈴は当時売っていなくて熊

帰ったり、いつもよく来る人で、来 淋しかった処へ外出から家の者が 時には勝手に鈴を振って人を呼ぶ はしい」「菜葉がしほれた」と言う 逆に自分が「水が欲しい」「餌が を振っていたのが、馴れてくると ようになった。留守で人気がなく 最初はこちらの要求に従って鈴



馬

佐野源左衛門

領地を親族に奪われて零落して、 上野の国佐野の領主であったが、 夜の宿を乞うた。 最明寺入道として旅僧姿で、雪の 条時頼が、民情視察の道すがら、 すこぶる貧困にくらしていた。 ところへ、時の鎌倉幕府執権北 佐野源左衛門は常世と名乗り

源左衛門すでに通れといふとこ 源左衛門いいおんみつに宿をか 源左衛門は貧窮のあまり、客を (明三桜3) (三三37)

申さうずるにて候ふ。」 もてなしに、之を火に焚きあて が秘蔵にて候へども、今夜のお がら今も梅桜松を持ちて候ふ。 あの雪もちたる木にて候ふ。某 じ、皆人に参らせ候ふ。さりな 「いやいや木ずきも無用と存

とある。それを川柳は、 佐野の宿其日雨だと居所なし 四八9

源左衛門先花ござをかりに行

御馳走に雑木をたった三本くべ 源左衛門人にくれたとぜいをい 源左衛門さぼてんなどはとうに (拾五)

松の葉をたいて旅僧へこころざ 常世心配寒いやら煙いやら 明六智4

などとうがって詠んでいる。そ た。それも謡曲につづられ、 して米がないので栗飯を食べさせ 源左衛門あわよく宿を仕り 繰言をいひいひくべる源左衛門 (明三義6)

を焚いてもてなした。謡曲「鉢の く残っていた鉢植の松と桜と梅と あたためる新もないので、ようや

源左衛門あすのあさのをしてや 源左衛門米屋もこりてかさぬ故 明三智4 (二五7)

し川柳にもよまれている。

ないから、痩せこけて、 さのの馬やっぱり武士の馬で居

源左衛門馬盗人を苦労がり

負けおしみ骨と皮との馬を見せ

たから、 という風で、まことに貧困であっ 人なればとふに出て行く佐のの (初35・拾六)

源左衛門さてひんなりとした里 源左衛門すでにうたひで出ると

借金も余程ござると常世いひ 源左衛門あじろに組だ足袋をは さて今朝は何を喰はふと源左衛

馬は居たが充分に飼料も与えて

あごで蠅追ふやうな馬常世もち

佐野の馬さて首をたれ屁をすか (天八・八)

○ 五 32

て呼びついける。 すると、気違いのように鈴を振っ れば餌をやってくれる人が来たり

出し小部屋からぶら下げた小さい ツルベの引上げがあった。 教えた芸は「お廻り」の他に張

き出し、戸外の鳥の声や、雀の声 が、春先になると、美しい声で略 二味線を引くと負けない様に唄い に盛に呼びかけていたものだが、

見ていると又捆るように催促をす

ミズや虫を揃えて食べる。じっと スコップの下へ首をつっこんでミ を蹴る。掘ってやると待ちかねて りに出てコーッコーッと鳴いて土

ことです。 探してやれなかったことは残念で 様もあきれたり、感心したりでし 蚊帳の中に入れて蚊を防ぎ、他人 をかけて防寒を図り、夏は一緒に した。もう十年の余になる以前の た。色々探したが到頭お嫁さんを だったと思う。冬は夜になると覆 と、寒い真冬の苦心は大したもの 三年間飼うためには弱る夏場

を産み我が家の記録。

「クロ」は年間三四〇余個の卵

春秋の彼岸には天王寺サンへ父か

いずれも今はいない、然し毎年

がいますよ。

見ている。ニワトリでもこんなの る。他所の人はビックリした顔で

ニワトリのこと

らないらしい。 もしたらカシッにしているので判 と答えて面喰っている。精々二年 と尋ねたら大抵の人は「サァー」 一鶏は何年位生きていますか?

からか日曜になると私の姿を見る 私がいるので裏の空地に暫く出し きていた。十五年になればテレビ いことは面白かった。日曜日には の安物ではあったが、人なつっこ たが……名前の通り白色レグホン てやることが多かった。いつごろ にでも出してやろうかと考えてい 「シロ」……最長命で十三年生

る……次に先に立って空地(菜葉

ていって小屋からスコップを取 屋へ走っていく。……私もつい むようになり、出すと先ず物置 と中でバタバクして出すのをせ

や大根などを植えていた)へ小走

続けたのも面白かった。 珍らしく長命で足掛三年飼った

家に飼った犬や猿の名も書いた経 母が先祖代々の経木に「チュッピ 池に流している。 木と一緒に、印導鐘をついて角 1」「シロ」「クロ」その他今迄

筋

Ξ

死ぬとか。 印度支那産だそうである。寒くと どり科の一種である。熱帯地方の も、淋しくとも、暗くても、 かゝる鳥だ。鳥に似た鳥類でむく 九官鳥を飼っている。実に手数の 私の事務所で一昨年十月頃から

を摺餌にして、水は清水を用いて 日に数回糞の掃除をしてやらな 野菜、糖、化学栄養剤、鶏の肝

貧乏をかくさぬ男源左衛門 ひけものでこそあれ常世とりそ (天六満2) 安六桜4)

ということであった。それでも 源左衛門よくも鎧をくわぬなり (拾六)

誠意をこめて時頻をもてなし、

じ着到につき……」 もあの馬に乗り、一番に馳せ参 りとも長刀を持ち、痩せたりと の具足取って投げかけ、錆びた 大事あらば、ちぎれたりともこ 「ただ今にてもあれ、鎌倉に御

あった。 と言上してねんごろに送ったので

第一番に鎌倉へ馳せ参じた。それ にまた川柳は興味をもって、 言葉にたがわず、瘦馬に乗って、 集した。その時源左衛門は、前の て、にわかに関八州の諸軍勢を召 源左衛門のその言葉を試そうとし 時頼は、諸国行脚から帰って、 源左衛門壱人にほう火だいをた

かげ干の馬も世に出る勢そろへ (安七仁2) (拾五)

源左衛門さっくと着ずにそっく 源左衛門ひんぶくりんの鞍をお (拾六)

源左衛門鎧を着ると犬が吠え (拾六)

佐野の馬戸塚の坂で二度倒れ

佐野の馬かんろのやうな豆をく 佐野の馬はなれ山でも二度たお (拾六)

佐野の馬下馬に居る内人だかり (拾六

諸軍勢常世が為の出ものなり

本ンのいくさだと常世はかぶじ (安七信5)

いる。 まひ などと見ていたように作って (安六松5

加賀の梅田、越中の桜井、上野の じ、また雪の夜のもてなしを謝 たというのである。 松井田の三個荘を領地として与え し、その時の鉢の木にちなんで、 時頼は、源左衛門の忠誠に感

鉢の木を大木にして御へん礼 鉢の木を土へうつして御返礼 源左衛門路ぎ廻った所領なり **営初35**

大雪にぬれ手で栗の三か国 40

痩馬に三かの庄は荷が過る 三か国いで其時の木ちん也 (四九23

栗飯で大祿の来る源左衛門 鉢の木は火となりのちに土と成 (五六6)

鉢の木がないと栗津を貰ふとこ 五六12

五六12

焚火代迄で栗飯代がなし 源左衛門酒だとてうし貰ふとこ

栗飯はどれだどれだと諸軍勢 (寛元宮1

ろう。また、 卒の間でも評判になったことであ などとそれが詠まれ、諸軍勢将

源左衛門雪の中から掘り出され 源左衛門雪の中から出た男 三九32

(三五五29

豊年の雪とは常世いひはじめ

を出納する納言、の位を持ったと 宗、青楽、舞踏を掌る典楽、帝命

では一応ふざけた事は言えない感 いう鳥で、気位高く、此の鳥の前

六ツの花常世が運の開き口 (八三4

ことであろう。 と、雪の緑も詠まれている。 源左衛門は喜び勇んで帰郷した

戻りには下に下にと源左衛門 ひだるいを忘れて常世舞をまひ 、明四松2

今こそいさめ此馬で御里まで 松井田を居城にしやうと常世 明六梅3 (一六25

し結末が詠まれ、それからは、 翌年の雪には炭の火にあたり 源左衛門貧乏神に見かぎられ 安七礼3 (三五) (四七28

立派な源左衛門となった。 貧乏を清算して、領地を持ち、 (二六10

翌年の雪には桜炭を焚き

二七12 秋冬鶯の声も、否、鶯以上の美声 毎日完全にしてやるならば、春夏 くれない。しかし右のような事を を、そのま、高音の人なら高音 晩はと、昼間は種々その人の声 が聞け、又朝はお早よう、夜は今 いと機嫌が悪く、良い声を出して に、低音の人なら低音に使い分け

沢を掌る虞、百神を叙次する秩 き)をすべる司空、農政を掌る后 た九つの官名、即ち百揆(ひゃっ る実に不思議な鳥だ。 九官とは、支那の舜の時に定め 百工の職を供給する共工、山 五教を布く司教、訟獄を掌る

憶えて真似てくれます。 じがする。 する。又真面目な言葉なら真ぐに 事と、実にタイミング良く挨拶を る。又生真面目な言葉を真似ない と、実にタイミング良く挨拶をす 余り馬鹿な言葉を真似ない事

浜 光

タケダ薬品

えて呉れたのは有難かった。 さ作りは厄介だろうと摺り餌を添 物にもまして珍重し朝日の射し初 める頃の一声にえもいわれぬ爽快 て貰った。とりわけ難しい鷲の餌 満悦の小生は自宅に持ち帰り何 ある患者から高級の驚を献上し

ある大寒の朝、鶯籠を庭の老梅

味に浸り朝起きに依びを感じてい

たつもりであった。 は籠鳥の心を察して花の友を与え の満輪の梢に吊した。小生として

緑茶色の羽毛を逆立て腹を膨らま 貴図らんや、この鶯は翌日から

して鳴かなくなった。 くづく考えさせられた。 と、元気のない鶯を看護りついつ た。妻からはひどく叱られる、 その翌々日遂に死んでしまっ 梅に鶯とは勝手な人の造りご

くことさえある。 耳には弔いの声として淋しくひょ 思い、これら野鳥の一声も小生の くが、そのたびに亡き鶯のことを 老梅に米て遊ぶ野生の鶯の声を聴 切生き物も飼うべからずと。 飼うすべを知らざること敷医者 年来毎年春に一度や二度、庭の

追々老生となりつ、ある。 鷺が藪医者に飼われ生命とり

福と追憶の幾年は過ぎたが迂生も

に似たるかなと嘆じつつ、鶯の冥

(はま生)

疲れ目 神経痛 疲れ 心臟病 屑こり

路

1/1

者

松 康

味

平

栄

選

野

西

沢

村

出

金 儲 け

沢

/]\

松

袁

選

儲かりまっかの挨拶かかす大阪人 退職がたった一つの金儲 儲からぬ養鶏今から始める人もあり 見栄すて、しまってからの金儲け 堂々とリベートをとる金儲け 金儲けしてる話で借りに来る 退職金濡れ手で栗の口に乗り 口先でぼろ口と言う金儲 金儲けじゃないが世話役ゃめられず 金儲け縁ない顔と笑い合 金儲けあきらめてから太り出し 金儲け今度は母の死にあえず 責任は他人に負わす金儲け 金儲けですと女の割切って 計画書儲かることになっている 金儲け下手で社会の底に住 スモッグなど気にせず金儲けに忙し It V 7 どんたく 宗太郎 和三郎 野迷路 たけお 歌 雄 愛 静 光 李 雅 3 万 朗 鳩 竿 蛙 水 道 鳥

> 金儲けもう税務署が知っていた 出稼ぎの遠さい とわぬ金儲け 立飲みでボロい儲けを語り合い 金儲けだけの凄腕親譲り

信用の二字が大きく金儲け

幽 可

谷 住

金儲け人の意見にふり向

かず

金儲け知らない奴がためて居り

与之助

定年へうまい話の網を張り

金儲けオールドミスは夢捨てず

金儲けやっぱり金が要ると知り

金儲けする程人間ケチになり 金儲け一生追って追いつづけ 銀行も貸す気になった儲けやう

> 損をして儲けるほどの策が出来 金儲け欲の深さの神 税務署で自分の儲けをきかされる 金儲け共産圏とも手を握 金儲け下手なとこまで似て育ち 金儲けおみくじにまで見離され 税務署へ儲けた額はしまっとき 金儲けしあきた様に居る茶室 金儲けつい人間 に残 業と言う金 を忘れ 頼 儲 か ŋ 2 H H 素身郎 みつお 譲 恵二朗 隆 不 隆 信

男

±

金儲け経済市況など聞 金儲け出来ぬ人柄見直され 金儲けのこっも仕込んで子にゆっり きようはきょうきのうの儲けに手はつけず 金儲けなら八時間にもこだわらず か ず 八九丁 十九平 藤 花 翁 波

伊久男

勝 伊津志

子

弥

生.

儲からぬ顔へまともに子がすがり 旭

峰

腰

税金がどうのこうのと金儲け

金儲けの話に詩心ふと動き

痴 雄 滋 存

车

4

代仕男 繁太郎

光

郎

急に声変る電話は

儲け口

雀

金儲けしたらと故郷へ書いておき あきまへんと言いつ、上手に金儲け 謝まったのは金儲けのうまい方 女手の夜更しつゞく金儲け だまされた事にして置く金儲け 金儲け先祖にすまぬうそも言い あの年で誰にやるのか金儲け

村 味 平

はすっぱを叱れば腰を振って見せ 煮え切らぬ相手で意気込み腰が折れ 腰紐の赤艶めかし笠のうち 折角の儲け話を腰 仕立師の自慢は腰の線を見せ 風あたりよけて総理の低姿勢 飼らんを腰にさげてる小あきんど 事故現場無傷の方は腰がぬ いんぎんな物腰脚が崩されず 逃げ腰で小言聞いてる生返事 二次会の話へ重い腰を上 折ら げ 11 伊久野 八九丁 伊津志 同 童 半 4: 月

句楽坊

仙

峰

月

腰ぐっと伸ばし戦争回 腰の線くっきりだしたニューモード 副木をつけたいような腰となり 婆ちゃんの踊へ腰がつんと伸び 足腰の立たなくなってからの悔 腰ぬけと言われて一命拾うとり 腰すえて闘病する気の植木鉢 秘書とも言われ腰巾着とも言われ 利を得るにさとき商人腰低くし 金持ちのすじで代々腰まがり 分の悪い話に腰が定まらず 顧 紀世美 摊 同 保 判 野 1: 月 無

五十腰日曜大工で思 物腰の低 腰きれぬ天秤の荷へ老を知 横綱の腰にみつけた灸のあ 意気込んだ儲けへ妻が腰を折り 働いて貰った腰をもませら 腰伸ばし晴れくと見る麦の出来 つら憎き箒たてても腰上 **雪便り持病の腰にふれぬ老** お駄賃をめあてに孫が叩く 人の親には見 い人柄 えぬ腰 皆称 い のの線 知 げ 腰 R E 与之助 繁太郎 同 可 [1] 男 谷 郎 住 雀

納得がいかぬと刑事腰 腰軽に女を立たすポ これ以上腰がのびない荷がかかり 師走の荷女担ぎ屋の腰強く 重い腰上げると雨が降っている ストのない腰弁時代をなつかしむ 温泉宿足腰のばす老夫婦 腰すえてかかった仕事巧くゆき 柳腰辛い浮世の風に 退院の腰の弱さへ妻が 人不足腰かけでよい来てお呉れ をすえ チ袋 耐 6 同 和三郎 静 光 ri 子亭蛙 水 道 K.

韓草のように生き抜く強い腮

満員車夫婦交 互 腰かけた石にも裏情捨て難し あの人の過去気の毒 腰を振り肌まで見せて泥鰌すくい 土俵際おしいところで腰がうき 不自由さ腰で調子を取る歩行 やなぎ腰粋にうつるも京の 選挙前七重の腰を八重に折り 弱腰と見られとことんまでおばり 袖の下見せつけられて腰が折れ お人好し嫌と言われず腰を上げ どう見ても女に成った腰の線 本腰を入れたとたんにチャンス逃げ 温泉で腰をもませる年になり 若い娘は無理にウエスト締めたがり 「点差ついてスタンド腰を上げ 話役は一番端へ腰をか でだけもう職場まで変えてい 上げて出てから門の長話し 弁で自由労務者と言う職務 出げたままおしゃべりまだ続き の線男は獣の眼でながめ に剣下げた日もあり平和 ほどにない弱腰と見透かされ い汁吸うて腰巾着が生き かけのつもりBGすぐにやめ に腰をか な柳腰 V 街 どんたく 十九平 みつお 素身郎 句楽坊 同 芳

朗

出 栄

秀才が腰きんちゃくになりさがり

宗太郎

仙

朗

中 峰

風

花

だけは達者腰にはサロンパス

二つ三つ腰を叩いて昼やすみ

奥さん

奥さんにすまないからと又逃げる 奥さんと呼んで新婚まごつかせ 奥さんのヒスを逃れて来たのれん 奥さんで和服を着るにも人頼み 奥さんは新法たてにのしかいり 奥さんがこっそり呉れた心付け 奥さんのきれ味生かす物価高 奥さんに小百姓もさせ守衛なり 奥さんのツバメと知らぬ学者肌 奥さんにしては言葉が脱に落ちず 外交は奥さん主人は無口なり 奥さんのお喋りうんざりして戻り 奥さんの手付きは税を抜いて酌ぎ 出世コース先ず奥さんに気に入られ 若奥さん女中さんにも講義され 奥さんが一番恐い美人秘書 奥さんをもらい仕事に湧くファイト 奥さんと呼ばれて新婦うろたえる 奥さんに見えるかしらと悪びれず 上品な奥さんとわかる市場館 奥さんのバートタイムでパパ炊事 奥さんと言われて苦しい家計簿 奥さん奥さんと宝石商の媚 奥さんはおだて、使う術を知り 奥さんと呼ばれてみたい年になり 奥さんにピンからキリまである団地 修怠期奥さんなどは 視野の外 脚光を浴びた出世へ賢婦あり 主病んで奥さん健気にバイトに出 披露宴まず奥さんに猪口をさし みつお 伊久野 恵二朗 素身郎 代仕男 素身郎 紀世美 繁太郎 同 同 讓 弘 雄 松 三郎 鳩 郎 道 子

> 奥さんと成れば女は名はいらず 奥さんが留守で値切らず買うてくれ 丸髷の奥さん十八だった母 奥さんと呼ぶにはつくり粋すぎる 奥さんはお目が高いとほめて売り 奥さんに信用のある二階借り 奥さんの正月ニプロン替えたがけ スピッツと暮す寒さん子が出来す 奥さんが互にこわい 飲み 仲間 奥さんと言われ秋刀魚を買ってくる 奥さんも苦労しまんなと送って来 アイロンの余熱奥さん放っとかず ったふりして奥さんとした握手 八九丁 弥 同 章 隆 雅 淀 李 雄 静 木 牛 月 月 城

奥さんが留守か一本よけつけろ 奥さんの感へほとく秘書困り 降り立った奥さんばかりにカノゥ向け さつま芋買う奥さんで親しまれ 奥さんと呼ばれてオールドミス淋し 奥さんにはかないませんと二割引 奥さんが一人しやべって恙なし 政論を吐く奥さんを女史と呼び 奥さんの後で荷物を持つ課長 奥さんが乗気セールス喫うゆとり 特売場今日奥さんの顔でなし ままごとの奥さん何もかもしゃべり ポーナスの封奥さんの手で切られ 電話口奥で奥さん知恵をつ 素面なら素面で奥さんに立つ噂 約足に

奥さん素人に

なりきれず 人は奥さん主人はアクセナリ 宗太郎 みつお 十九平 幽谷 伊津志 宗太郎 恵二朗 句楽坊 旭 秀 同 隆 Ŧ 識 同 t 史

> 奥さんへお世辞忘れず酔っている 奥さんに敷かれ世間に 敬われ 奥さんと言われ不惑の化粧派手 不きりようが若奥さんのお気に入り 奥さんの前では彼女も 初対 奥さんは才女旦那の影うすし 子の躾けうまい奥さん化粧せず コンド以下奥さん同志ウマが合い 奥さんを持ち上げ値切る手を封じ 奥さんが切り盛りをする町工場 俄か客素顔の奥さんあわてさせ 奥さんの智恵浅はかな社会面 サロッパス貼って奥さんお出迎え 紀世美 伊津志 野迷郎 不 杏 酔 淀 旭 井 保 花 仙 月 墨

佳吟十句

押売りへ奥さん女中になって逃げ 奥さんをもらって長い八時 奥さんの愚痴は恋した過去持たず 奥さんのポデーガードと言うみじめ 奥さんがリードしている無事な日々 奥さんにジロリ人物評価され 野菜高奥さん総理呼び捨てる 奥さんの歌で干物よう乾き 奥さんに嫌われ主人には好かれ なに着ても奥さん憎いほど似合い どんたく 興之助 П 夢 刨 蛙

縋

il

り合う奥をないの強く生

旧姓で呼び合い奥さん最良の日

八九寸

倖いっぱい奥さ 天 h 0 迎 元 弘 朗

出張のポケットへ奥さんの守り札

家計簿の秘密女中釘さ

滋 万 愛

奥さんがまだ学生で外食 奥さんが器用に泣ける技をも

現 代 柳

出生地(七) 川柳に手を染めた年月 趣味(一一)配偶者の有無 自信の句 現住所(五)生年月日 姓名(二)雅号(三) 一句 職業(八)電話 00 川柳以外の (111) 3 (九) 別号

300 大 多 和 粒

303

中

大多和一雄(二)一

粒(三)

中がある

円次の

日席題三題発表各題三句、

時・揃う、当

開く・祝・百・ 開催。兼題、

瀬中町二六四ノー(五)大正三年 大光双望志 (四) へとどかない(一〇) L 月二十日 (一二) 昭和五年八月 維具職 九 3 すがりたい気持の雲 (八) 静岡 静岡市八千代町 静岡県静岡市見 85 III 年 カメラ 0 = 公 -四月 Ŧi.

静岡市(七)塗装業

五

四

301 石 原 伯 埊

304

黒

田

緑

(=)

六日 謡曲(一 碑に無名の酒徒と刻むべし(一〇 国鉄職員 石破良子(四)広島市庚午南町二 丁目九ノ二(五)大正九年七月十 八月 (六) 石 一)有(一二)昭和十三 原 健 | (二)伯峯(三) 鳥取県米子市 九 我が墓 (t) 市高瀬町五四六 ②二〇四八 (九) 正三年九月十日 黒田宗次

302 横 山 声

句

川柳」

(神戸

V

永一 昭和三十二年一月 洋服を着ても大工のく せ 八二一(七)大工(八)一 B (一〇) 浪曲(一一)有 四〇(五)大正七年八月十三 (四) 岡山県和気郡吉永町吉 横されま 岡山県英田郡作東町角南 一切ちを 一つかったい を出し 九

西 祥 典

独り言か肩先をぬらす(一〇) (85)四九三三(九)深い眠り月 大正六年六月十六日 静岡市馬淵九丁 (二)祥典 昭和十 後二時から南館一階別室で開催。 川柳会二月句会は二十七日(土)午 日(水)午後六時からコクヨ株式 柳会(大阪市)二月句会は二十四 波親和クラブで開催。▼コクヨ川 露川柳会二月例会は十四日(日 路郎主幹出席。 阪市) 会社階上で開催。▼大阪逓信病院 一月十八日 日)正午から阿倍野区松崎町三 大萬川柳十四周年記念大会(大 一〇割烹大萬楼上で開催。以上 は昭和四十年三月十四 柳会(大阪市)句会は (木) 午後六時から難 ▼川雑米子支部松

有(二三)

minim

和四十

八日

(日) -年四月 川柳大会は昭 市)百号記念

過されるよう柳人お黙 の一刻を楽しい句会で 日前電停東入ル自安寺 出席をお願いする。 で開催。▼南海電鉄川 時から北ノ新地朝千鳥 句会は三日(水)午後五 い合わせの上多数のご で開催する。早春の夜 (月) 午後六時から千 柳部(和歌山市)二月 本社三月句会は八日 七面短詩文学クラブ

市生田区中山

正午から神戸

手通三丁目八

六海洋会館で

(青森県) 句 H 句笺に一句ずつ書き裏面に雅号 で開催。 神戸市生田区加納町一丁目二〇 明記の上、郵券五十円を添えて 柳平安百号記念作品募集。 郎居で開催。 市)二月十四日午後一時から吉太 七日(日)午前十時から熊本市辛 季川柳大会(熊本市)は柳誌展望 中京区夷川通局丸西入平安川 百円同封のこと。送り先は京都市 表七月倍大号。 を出さぬこと。〆切五月一日。 詠五句、選者ごとに別紙、 島町富国生命KK支社四階ホール /九中島秋男宛。▼噴煙岭社春 [絢一朗·福永泰典·堀豊次、 回自祝を兼ねて昭和四十年三月 村好郎氏の柳話があった。▼川 ▼富柳会句会(富田林 清水白柳氏の句評、 発表紙入用の方は

▲高須啞三味氏(東京都)から、 「二月号拝掌、少しずつ早くなっ

会は極めて盛大で、

RKK熊本放

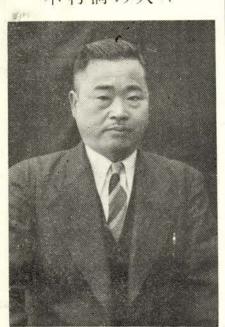
さひろがるお買物 大阪梅田本店 東京大井店 数寄屋橋店 神戸三宮支店

投句は 選者北 発行日のおくれるのは心配です の尺度にしています。 社の新春文芸川柳の部の特選に、 星影の幹事の諸氏とはかって運営 ので、句会の企画や案内は主に私 会長は河村日満氏と私ですが、 ▼森田茗人氏(鳥取市)から、 れそうなのが楽しみです」と。 が、今月のように早いのは大変う 特選にそれぞれ入選された。そし 柳文化会の大崎筆染氏が長崎新聞 屋一宮市に約一カ月滞在。諫早川 しています。」▼川岡霊眼子氏 満氏は市会や組合活動で多忙です 大西八歩氏は職業柄旅行勝ち、 てゆく発行日を見て、 て一月二十三日の諫早川柳新春大 同じ島田破竹氏が長崎時事新聞の 鳥取では現在約二十五名が、毎月 (瀬早市) 句会に顔を合わせます。会長の しいです。四月にはお目にかか 福田多可志·北村三歩·但住 は二月十八日から名古 その意味で 先生の健康 日 副

展

にしてしまい(一〇)写真・絵画 (一一)有(一二)昭和二十六年 熊本市相撲町三(五)大 (七)薬局(八) (六) 熊本県玉名 憎らしい金別人 (三) 緑(三) 馬奮句碑建設委員会事務局宛。▼ 碑建立基金は一口百円で幾口でも 開催。 午後一時から米子市公会堂和室で 年二月七日 送金は青森県三戸町坂本雨山方、 可、建立予定地は三戸町城山公園、 山市歩行町PTA会館ホー 第五回伍健忌川柳大会は昭和四十 ▼松尾馬奮氏 (日) 午前十時から松 ルで開

不朽洞の人々



京都通信病院薬局長の大鶴氏

に移りつつあると言うのに一

―。しかし大衆がそのこ

た川柳のような気がする。世は正に叙情から心象風景

お色気と説法(ボヤキ)を詠むことが僕に与えられ

さを示して居られる。▼工藤甲吉 分けて」の句を寄せられて、元気 黙平氏(豊中市)は最近では歩行 抜き友人知己に贈られた。▼石井 わぬお父さん」の句を手拭に染め 生の健康第一主義を見て大いに共 で、つい句会へも失礼している由 も困難から難渋に進んでいるの しかし、「八十四髪も真ん中から (青森市)は「川雑二月号で先 わが家のモットーにもしたい

れた記念に、「金持ちになれと言 祥園氏(犬山市)は還暦を迎えら の選考委員になられた。▼山田 ておられる。▼正本水客氏(大阪 ばまんざらでもないと意を安んじ とすることが出来、この調子なれ の初句会ではビール大瓶一本を空 ようやく健康を取り戻され、新春 は第三回国鉄川柳年度賞作品 木笛我氏から「川柳雑誌」五、六 古本屋からずっと前に買ったもの 十冊をもらって来ました。神田の と思います。先月上京のさい、 私も広島地幹事なので責任を感じ 市)本年七月には全国鉄川柳連盟 健康で」と。▼山内静水氏(竹原 す。青森は雪、雪、雪。どうぞご 由なので、小生も出たく思いま とのこと。四月には上京される の全国大会の開催地が宮島なので て居ります。

県)は二月三日から五日まで東京

が出来たと。▼渡辺暁童氏(愛媛 く見て新春の気分を満喫すること

で開かれる全国婦人教育研究会に

在京中のご子息と対面され

県のコンテストに入選、松山市で た。二月十六日自作の公民館報が

蔵野の入陽の色で陽が沈み」 の表彰式に参列授賞された。

林大字錦織北町高橋定方へ転居。 ▼浅川八郎氏は二月一日から富田

と命名された。お慶び申し上げ 四十年一月二十二日次男出生、 渡辺伊津志氏(宿毛市)は昭和 淳

か盆栽いじりや絵や彫刻などをも

ておられたが、幽谷氏も年のせい

たしなんで日日消光して おられ

▼野村味平氏(加賀市)

氏は血圧が高く心臓が悪いと言っ

太楼氏と会い歓談された。麦太楼 ▼江国幽谷氏(岡山市)は津田麦

> が昭和三十九年五月十一日脳溢血 のため死去。年八十四才。謹悼。 ▼中島小石さん(大阪市)の母堂

酒

清

・魚

金露酒造株式会社醸

電話開通

リの雪を払えば緋がこぼれ 電話が開通した。大阪七一七局七 ▼橋本緑雨氏(大阪市)の自宅に

7

ッポ

材し、作句・講演の実況が九州一 送局からテレビ・ニュース班が取

ブされた談話の容姿などを興味深 円に放送され、氏のクローズアッ

阪三九二局五一三七番

電話番号変更

市)の自宅に電話が開通した。

二七二番。▼木村水洞氏(大阪

番号が変更になった。西宮三四局 小沢史葉氏(西宮市) 宅の電話

四〇八一番。 正

非情と訂正 前号一〇頁上段六行目、 非常×

不朽洞会か

☆常任理事会

崎町の大萬階上で開催。新たに五 松園·小川恒明·八木摩天郎·傍 の集いをした。清水白柳・菊沢小 たので新旧常任理事の初額合わせ 名の常任理事下記の通り就任され ▼一月廿七日七時から阿倍野区松 梅里の四氏出席。 久志·春巣・好郎・栞(事故欠) 島静馬の五氏(摩天郎病欠)、多

☆新会員紹介

▼松下たつみ (高槻市) Œ

白溪子氏推薦

月

僕なりの詩の触覚と表現形態に決して満足してはいた

僕はこれを甘い鋭さと辛い鋭さで料理する。だが今の とを見せつけ、また大衆がそんな句を好まれる以上、

すたりはせぬかと悲しむ。

僕はひそかに詩の川柳は醸し出されても川柳の詩が

▼羽原静歩(守口市)正

柳志氏推薦

兼題 第百六十八回 大 萬

JII 柳

入選発表

投句総数 四 十 五 句 年 五 句

下座から企画ひっくりかえす案 明 責任者出せと下座が承知せず

スカンタコイーと下座へ来たお酌 ねぎらいに立った下座で絡まれる 美 慶之助

母はまだ下座立ったり座ったり 反主流不気味にどくろまく下座 西宮野 松原 万竿 菜

下座から吐く正論へ振りむかず **密附の話出そうで下座そつと立ち** 玉島旭

教え子の知事が下座にしておかず 京都八九丁

謙遜の下座主人に手をやかせ 署長から来るお流れへ座り替え 911 朗

芸も身も枯れて下座でかしこまり

へそ曲げた下座へ誰れも呼びに来ず ピーピーと下座へマイク鳴るばかり 泉北 大阪章 郎 雅

禿げているので下座から押し出され 座布団も 遊 う下座で割勘か 香川 大阪晃 夢

二た部屋を使い下座の線が出来 下座から呼べばお膳を跨いで来 下座もう義理をすませた顔で消え 下座まで如才なく来る票稼ぎ 大阪金三 和歌山 木魚

下座からさした盃そのまんま 息き抜きに妓下座へ酌ぎにくる 弁舌のうまさ下座を 釘づけし ストープの温さも来ない下座なり 一合瓶だけでは足りぬ下座なり 富田林東雲楼

大阪阿 茶 下座へは仲居ついでのように酌ぎ 真っ先きに下戸は下座にサンと居る 下座ようようほろっとしたら会終る 売れっ妓は下座へ一べつくれただけ 先輩が下座へついたいろは順 下座には眼中もなく妓酌ぐ 酔うほどに下座盃投げ合うて 官服で来たのに下座へとも云えず 遠慮なく酔える下座が好きな僕

すき焼きの世話も下座ははつとかれ 魂肌があって下 座の意見訳く 火阪 大阪 木

下座から酔わないうちに撮れという 下座へは下戸を揃えた披露宴 頭として下座 を女動かない 和樂 大阪保

下座から見たゴマすりの浅間しさ 西 ŝ 野

下座には熱意の消えた領ば Ė 背 かり

下座では去にたい足がしびれて来

持って行く銚子下座に分捕られ 32 闁 遠

朗

床の間もないアパートの下座とは 祖母が居て上座下座をやかましく 大萬川柳ベストテン決定 昭和三十九年度

1: きさ子 小松園 二六、〇 岸和田 槻 阪

大阪梅里 0 \mathcal{F}_{i} DA 多久志 木 晃 志 五 一六、五 七、 五、 五 六、 五 五 西 笠 大

> 岡 阪

九 六 七 Ŧi. Ξ 宗太郎 雄 [in] 力 清 春 美 三 Ξ Ξ = 四 四 五 大阪 羽曳野 和歌山 富田林 布 石 阪 宫

次ぎの兼題「誘惑」五句以内 切 三月七 1 日

以下略

席題の選者

西川晃

高木桃里

月五日着便で投句料五十円(郵

券可)を添えてご送附下さい。

四月の兼題「小切手」 発表 切 四月 三月十四 +

日

B

投句先 大阪市阿倍野区松崎町三 10 四月二十日 大萬川柳会

第十四回

大萬川柳大会ご案内 阿倍野区松崎町割烹大萬 三月十四日(日)正午始 TEL(621)3935

兼題 兼題 兼題 兼題 昭和三十九年度ベストテン表彰 兼題 兼題の投句は出欠に関らず三 開会ノ辞 伸びる 夜更け チャンス 女 裏 心 話 各題五句以内 西 麻生路郎先生 松江梅里選 川村好 内藤きさ子選 傍島静馬 **菊沢小松園選** 本多久 水 郎 選 志栞 選 里

出席不能の選者の方は予めご 久志 岸本木魚 本多柳志 若本多

閉会の辞 ベストテン招待懇親宴 六時終了予定 一瞬下さい 吉田田 韭 井 (午後

主 大万 111 柳



投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼次字は正本社宛

2 月 月 8 句 H 会(大阪市) 午後6時

会場

千日前自安寺

ところ、いつもながら胴に入ったもの、 句を挙げて作句の参考にと句評せらるる となって居ってもかなり寒いが、 に輝いた。時に午后九時(摩 ある不朽洞杯は、新人中村ゆきを氏の句 後、席、兼題の披講に移り、本日の栄誉 旅風・弘道・孝正を始め、多数の人々の めかけて満員の様。今夕の白柳氏の句 暖房装置と、人の集まるに便利な大阪の 繁華街だけに、定刻六時前には続々と詰 (別稿記載)は、本誌一月号より薫風 暦の上では、立春、 梅もほころが二月 会場は

みさ子・ど女・清人・進之助・庸佑・凡 秋•梅里•行人•句楽坊•有子•金三• 宏子・白溪子・たつみ・柳志・梅志・文 ・白柳・阿茶・幸雄・舟遊・すすむ・柳 京・かつみ・いさむ・一舟・一栄・清子 ・痴亭・真砂・八郎・素郎・ゆきを・水 人・花梢・すみれ・美房・いわを・静歩 堂·野菜·好郎·井平·水客·瓢太·玲 出席者=路郎・摩天郎・静馬・圭井

子・季賛・恒明・葭乃・宏子

呼び捨ての語尾で気配を考察し 呼び捨てでまた呼が母が気に食わず 呼び捨てはしません猫までお玉ちゃん 呼び捨てで行くぞと恩師酔い給い 呼び捨てにされて不甲斐のない五十 入れずみを呼び捨てにしてピンもはお 呼び捨てを今日からされる幸を知り 穏やかに呼び捨て罠を気付かせず 呼び捨てにしとき済まんと眼で合図 呼び捨てにすると甘えてくる年増 呼び捨てるくせが養子の気に降り 呼び捨てにしたのが今は社長なり 肩書のない年寄を呼び捨てる 呼び捨てて呉れるは伯父が只一人 呼び捨てもせずに育てた子がそむき 呼び拾てもならず我が子にくんをつけ 名も無き歌人晶子を呼び捨てて 給仕へも呼び捨てにせず新社長 同権になっても妻を呼び捨てる オンリーを呼び捨てにして物足らず 呼び捨ててすでに歴史の人と知る 呼び捨てにして抱きしめる旅の宿 殿様が呼び捨てられて居る楽屋 呼び捨てでお叱り受ける電話口 呼び捨てにしたはお客の居る手前 取次へいんぎん知事を呼び捨てる 友情に疑いも無く呼び捨てる 呼び捨てた離婚の人が出世する(白崎)正男 呼び捨てにあまんじ妻の四十年 呼び捨ても空気の抜けたベターハトラ 雲行きが悪し呼捨て 逆らわず 兼題「呼び捨て」 麻生 一路郎 あいき 圭井堂 ゆきを 句念坊 句楽坊 摩天郎 白溪子 ゆきを たつみ すみれ 花 真 文 静 野 三千弘 好 水 九丁 册 菜 雀 圃 梢 砂 秋 砂 步 * 平 客 コンターペママの自信が抱いて来る

里の母あんじょう抱きぐせっけて去に 抱き合うて激ましあった遭難記 卵抱く鳥の愛情凝視する 寝酒抱いて他人ばかりの中にいる ラレゼント嬉しい仕ぐさで胸へ抱き 呵責なく呼び捨てで呼ぶ法務局 呼び捨てにしてる所へ恩師が来 抱くと寝る降すと起きる子に育て めぐりあい誰れ憚からず相抱く 膝を抱く孤独に落葉しきりなり 猫抱いてギブス淋しく陽をみつめ コールインベストつくした身を抱かれ 将来へ抱く希望なく今日を生きる 猫抱いて月賦あっさりこともられ 出発のバスへ幹事はトラを抱き 大空を抱くプロンズの像に佇つ 抱き込みに乗らぬ一人を持て余し 抱き合うて泣いた魔女にも嫁の口 膝頭抱いて日長をもてあまし 抱き合うて手放しでかいている再会 倖せは四十台に孫を抱く 抱くひとが違いますよとふられけり 肩抱けば女涙の眼をそらし 抱きしめて恋にくづれた春の宵 どんな夢か人形を抱いた娘の笑顔 見学の義理で施設の子らを抱き うちの社長呼び捨てにする客が来る ババと抱きつく児あり帰路急ぐ 激情に抱きしめる手の強いこと おあいそに赤ン坊抱いて泣き出され 、形を抱けば無心でないこども < 川村好郎選 白溪子 進之助 柳宏子 圭井堂 かつみ 摩天郎 かつみ すみれ 柳宏子 静 秋 雅 風 客 馬

> 煩悩に負けた其の手で妻を抱く 好 後藤梅志選 あいき 句念坊 士: 34.

折箱の片隅海苔の香りする 片隅にオルグと直感される群 片隅の手みやげ子らは見逃さず 片隅のないアバートで面くらい 片隅で待ち呆けらしいコンバクト 片隅で泣いた日も在り人気歌手 片隅へ積んで目出度い荷が目立ち 花散った鉢片隅にほっ とかれ 多数決片隅の手も数えられ 居酒屋の隅一滴も無駄にせず 片隅の拍手サクラと間違わ よう流行る隅小奇魔な靴磨き ストープを片隅へやる孫が来る 片隅で易者は寒く灯を囲 教室で日だまりのある隅へより 片隅に置いて外のをよる特価 くさっても鯛新聞の隅で死に 伝言板片隅に書き二重まる 片隅に住んで都心をまだ知らず 片隅に整理未済の嵩がふえ 大阪の片隅みに居て大地主 片隅でパトロンらしいのがおばり 片隅へ呼んで一本釘をさし 片隅に寄ってぶつぶつ不平組 庁隅で電車待つ間の風を避 万隅に坐して話の外に 居り 人気者先ず片隅へ来て座り 万隅に 慣れた 暮しの身の 廻り 「隅に生きて都会の見栄をはる 一隅で勤め気楽な口がきけ 八生の吹溜りという眼鏡ふく n どんたく 三千弘 三時 白溪子 たつみ たつみ 水 清白花 聆 梅 庸 里

株題「喬 下 正本水客翼片隅の上り下りも 職場にて 金 三 この隅は鬼門でしてと老夫婦 一 栄 よう来たなと片隅へ坐らされ 梅 志よう来たなと片隅へ坐らされ 梅 志

細い道堤について橋の下 事故現場あつらえ向きの橋の下 俄雨釣り人あつまる橋の 平安の絵巻橋下を屋形船 橋下の寄せ屋物議の的になり 橋の下から煙むくく阿倍野 橋下へわざわざ降りて釣へ佇ち 橋下を出れば小雨がまたしきり 橋下の中洲でチームワークとれ 橋の下一人歩きを怪 かき船の灯が橋下へ人まねく 観光船マイクで見上げさ 橋の下のぞいて巡査あるき出し 船渡御を橋の下から拝まされ 太皷橋の下から見れば面白 橋の下洪水期までのゴルフ場 橋下を見下す人に人たかり おでん屋の言葉とぎれてガード 橋下で開 橋の真下に立って旅思う 下に露天風呂あり旅の宿 下を釣場と見せた鮎の腹 席題無 く伝 F 学 説の人柱 しまれ 松江 ΙE 世 K F 一本水客選 梅里選 句念坊 水容 ゆきを 柳宏子 ひさ子 ひき子 野迷路 白溪子 いわお 清 章 柳 水 梅 進之助 かつみ É 一栄 菜 雅志京志志柳

> 無学なることの不自由を子に托し 職人の腕一本で来た無学 文化財になって無学は尊ばれ はしがきに浅学非才と書いただけ 無学でも頭の下がる事を言 無学でも売れるきれいな顔を持ち クマさんの無学はがめつう生きるたけ 質録があって無学とはみえず 学のない引げ目は金で仇うつ気 謙譲の美徳無学で押し通 否みこみがよいと無学をはめられる 真心を無学の人に知るニュース 笑うてた無学に日毎借りが増え 立志伝無学が逆に生きてくる 無学でもものの倫理の解る人 女子大を出た程無学口がたち 飯場では巾を効かせている無学 女子大を父が無学で承知する 金力で無学をカバーしたつもり しょうむないとこで意見の合う無学 一種からたゝきあげたと念を押し 列で無学な親とみられまい いけんと努力無学にしてをかず 席題「なやみ」 八木摩天郎選 摩天郎 柳宏子 進之助 たつみ 主井堂 たつみ 清 清 水 野 庸 舟 人 人 太 平 菜 佑 郎 雄 太 客 栄 郎

月のものがないと悩みをいってくる。 をことんになずみないで、根はなやみ ないな返事を書こうなと様はなやみ ないな返事を書こうなと様はなやみ ないな返事を書こうなと様はなやみ とことんになやみないた娘を嫁かさ たつみ とことんになやみないた娘を嫁かさ みさ子 とことんになやみこの頃二食主義 清 人

名を逐げて無学は愚痴にしておらず

人材を集める腕があ

る無学

大学生無学があごでこきつかい世渡りの方は無学に 教えられ

柳志

進之助

譲っては見たがなやみはまだ残り 金持てば金が悩みの種となり 蝶よ花よと育てて母は娘になやる 後妻には嫁りたくないとなせむ母 手形でなやみ税務署になやまされ ぜいたくな悩みと思う遺産わけ 繁栄の蔭に少年Aが居り みちたりた暮しに持病ある悩み 功なってみれば子運の無いなるみ 易の灯にあたりはばかるなやみ事 そのわけは妻にも言えぬなゃる事 なやみごと申上げますお賽銭 悩み事きわどい惚気きかされる 理解してくれぬなやみの反抗期 何なやみあるんやそれだけ肥えとって 笑われているのに悩みまた愚痴り 娘を嫁にやってなやみがまだつっき なやみなど無いわと彼女よくふとり 青春のたかがニキビになやまされ 道ならぬ恋になやんで相談欄 なやみ事相談欄の生返事 なやみごとたかが算木の灯にたより 立飲るへおなじなやみを持って寄り 摩天郎 すすむ 圭井堂 圭井堂 たつみ 進之助 柳宏子 進之助 志 郎

又してもおっちょこちよいが口を出し 口出して又叱られているも母 口出していらぬお世話と断かられ その後は口出しするなとせきばらい 半可通尤もらしく口 口出しは腹に一も 口下手な夫へ妻がたまりかね 口出して纏まる話わやにする 口出して置いて土壇場もう居らず 席題「口出し」 つある男 を出し 金井文秋選 すすむ 圭井堂 摩天郎 いわを 柳宏子

お気軽るに

圖吳水店

高橋操子

TEL岸貝局②六六三一岸和田市野田町一七五

PTAの口出し大事に扱われ ちょっとした口出し逮捕の道しるべ まかされてからの口出しゃかましい 口出しもするがわかりのい、姑 顔固さに聞いちゃ居れぬと口を出し どたん場に才女の口出しに扶けられ 口出しはしたけど寄付はちびっとき どたんばになって口出し知らん顔 口出しをして醜態をさらけ出し 酔うほどに無口やたらに口を出し 口出しはするが貸す気のない構え 余計な口利いて香具師から鴨にされ 口出して損したたとえ教えとき 猪口の手をおいて横から口を出し 出しをしそうな妻の袖をひき 出しへみんなだまって茶をすいり 出しをして口出しに叱られる 出しを止めた女房がよう喋り 柳 花 静 静 清 郎馬

厄払いにしては鰯の安あが どたん場へ来ても首だけよう吊らず

双 清

困ること出来れば隠居引き出きれ

句

限界を知らぬ若さが書く辞 汗すくの笑顔くずさずフィナーレ

表

許されてからかみしめるめしの味

清 柳

子 志 笑 時

恢復期うれしいめしがのどを越し

土性骨を作ってくれた他所のめし

合理化は先ず下つ端の首へ来る

し娘十九を単車で

新鮮と値に敏感な市場 外車で来たのに入口誰も居 初一念惚れた女を妻に持

籠

ず ち

看板のめし大阪のプロフィ

N

無駄めしを食わせる人の知恵がいり

金 静

首たたく癖もお店の育ちにて

すい

む

真白いめしを夢見た立志

珠 Ξ 新人事やっぱりトコロテン式でした

初一念に遠い姿で飯場に 厄払う鬼面へ子供は逃げまわり 初一念もう親せきも取り合わず

居

小松園

栄

志

明

歩

雛壇の首はチラホラ居眠り

下駄履きできて入りにくい門構え

いさぎよく敗けライバルの手を握り ズボン敷く癖ライバルが出来てから ライバルを見舞えば逆に励まされ 入口で押してくれたはスリだった

圭井堂

里

柳宏子

口出しをしたら首謀にされていた 口出しのうっかり弱いところに触れ 秘事をあっと言う間に口出する 口出しはやめとこ金の要る話 金のない立場ひとこと口を入れ アドバイスする耳打ちが有難し いやなとこへ口出しをして目撃者 タイミングよい口出しが座を湧し 出した手まえ一口のせられる 出しへ職人根性が八つ当り 出しも出来ぬはがゆさ平の平 ゆきを 進之助 いわを 文 庸 野 梅 水 清 佑 志 菜 客 栄

新しい年へ都

川雑 阿倍野支部句会 (大阪市)

入選もせぬ画に憑かれまだ独身 金井文秋報 滋

川雑 玉造支部句 会 (大阪市

反省を空間がある三ヶ日 新人の目に旧態が写りすぎ 十年目まだ新人の気で甘 食べたいし肥るし餅は目の ウエストを気にして併の味気なし 自然増収みたいに新春の年重ね はしゃぐ子に寝正月などとこえゃら 年賀まち晴着のままで寝てしまい 新人のつもりと肚にも無い言葉 西 出 え 仇 栄報 美祚子 風仙洞 志津子 滋恒 Œ 白 雀明雅

尋常に首の座につく 定年 初一念弟子入りの日を忘れかけ 首のない幹部労組の指揮をとり 東洋の魔女に仕上げた初一念 ハンストだ首の事など、考えず 入口に妻が待ってる給 たてに振る首を待ってるしびれが来 残されたライバル同士のコップ酒 おめかしへ女おんなを意識する 入口と女の巾を目でくら 本腰の恋ヘライバル向きを変え すぐ剝げる嘘で自分の首をしめ 合のよい 料 期 期 待 綺史朗 あいき 郎 茶 秋 生

お化粧が一と役かって夜の蝶 利用価値ゼロで一と役持ちたがり もめごとへ一と役買って座がなおり 役つけてうるさい口を封じる気 式場の一と役もって落付 会計の役もたされて酔えぬ旅 一と役へ威儀を正したモーニング と役もつかマスターの夢を捨て と役がついて名刺をすりかえる と役を買ってごろつきどやされる か 柳宏子 寿美司 六龍子 市 金 有 文 * 秋 東 Ξ 子 栄 郎

大鉄支部句 会 (大阪市

悪友が奥さんといて振りかえる 限界を知ったか無心言うてこず 見習いの方が美人であるダンサー サヨウナラもう振りかえる恋でなし フィナーレトランベットは天を吹き 大学を出た見習いはよく変り サービスの限界裸にはならず 振りかえる父母の背丈は丸く見え 怠けたにつきる一年振りかえり 平凡な一年でした大晦 お替りへ限界ですと箸を置 見習いの車掌語尾にある固 歯車の限界という音 道具は呉れたが見習い走り歩くだけ 振りかえる向うは雪の山 友情の限界を知る金を借 ィナーレ楽屋は誰も人がいず 12 辻 続 ts 白溪子報 ŋ ŋ 日 < 客遊子 白溪子 一六三 笛 たつみ 加 万 水 鳥 虎 水 生 的 泉滴 児 靈

川雑

ハワイ支部句会(ハワイ)

タイピスト夜はホステスのきらびやか ホステスの事も書いたり旅日記 乳吞児を抱えホステスにもなれず ホステスの痰呵を切った鉄火肌 ホステスの愛嬌ひるの苦を忘れ 浮かれ男はホステス相手にからんで居 どう見てもホステスに見え観音像 ホステスに座りこまれて飲みすこし ホステスの美人へみなの視線より ホステスは細かい事にも気を配り 平凡なチップホステス気に止めず ホステスが日英両語でよく稼ぎ ホステスの身の上うわの空できき ホステスの子供は亭主ドよくなっき ホステスを兼ねてマダムが如才なく ホステスが替り各種まで替り 女王蜂に以たホステスの目の動き ホステスの演技と知らず嬉しがり 樂山快夢起報 河童風流 あき坊 快夢起 カロ女 平八郎 エス子 蒼蛇楼 万里步 柳 泉 拝 生 中 茶 葉 水 風 溪 太 園

食品と原資材機械包装の総合誌

品

Food Science

大阪市北区源蔵町 5 (361) 9373代

東京都千代田区神田鍛治町2 (252) 4941代

名古屋市昭和区村田町 2 (88) 9069

川雑 京都 支部句会 (京都市)

猪口さして淫なことばふさぐなり 石が泣いたり笑ったり加茂川も四条 石群に大将がいる足軽がいる 潮騒に鬼の爼板洗われる 追いつけば出発と言ふ足痛の 道を説く和尚の足がしびれだし 足痛が決めたコースの車代 呆っとして大胆なカオの人がヒーロー 木屋町で二十才になった猪口と居る 大胆不敵な鉛筆が3Bである 大胆な茶釜に化 け 7 いた狸 中局 句楽坊 雀報 ゆきら 和三郎 司 喜 白 礫 鳥 真 男 雀 堂 砂 郎 由 史

川雑 大聖寺支部句会 (加賀市)

毒でないかえ八十の年が言う 酔眼にやたらに女美しく 酒とろり私の心

を春にする

邓

羊

野村味平報

先代の残した 松に 備前支部句 養なわれ Ш (岡山県 声報 Œ

老松の 松根油取った話で山を降り 松の内ちびりちびりが癖になり 松のある家ですと道教えられ お隣の自慢の松で籾が干かず 松すぎて一年の計ねりなほ とこしえに幸あれ松の青の濃さ お手植の松すくすくと国平和 三代もかかり泉水の松の 昔語りか風に鳴る 影 あきら 柳風子 鼓 芳 月 Щ 美 声

事故に明け事故に暮れるとは大げさな

同

川雑 岡山支部句会 (岡山市

巳の年の蛇人間を恐わがらず 蛇料理喰うたスタミナうたがわれ まむしでも飲めと気弱がはけまされ 巳の年へ期待をかける金詰り 変蛇になりそう話題をそっと変え 老母出てさとせば蛇の去る姿 あたしはネヒ年生れよと嫉かれてる 寝て待った幸運巳年の春が明け 冬眠は蛇だけで ない失業者 蛇に似た棒切れが待っている夜道 浜田久米雄報 久米雄 佐加恵 鮫虎狼 飴ん坊 弘 郎 路

始めて孫が生れて祖母多忙 始めての背広も似合い成人し 受験生年の始めもきびしい日 学校の風邪の調べにみんな咳 豪雪と豪雨日本の裏に住み 傘の雪重さ二人でわけてさし 雪降ってほっと一息

スキー 始めから予感のあったこの勝負 始った余芸に下戸は 勅題の鳥生きている 歌始め 大虎も始めの内はネコみた 始めての終り聖火を拝 雪蹴って蹴ってラッセル泡を吹き 酔うているパパの口ぐせ封じられ 闘病のカーテン越しに咲く友情 カーテンを引いてゆっくり大あくび 風邪気味も飲む相談にのってくる 正確なダイヤ雪道あわてさせ 道あけに境界きっちり雪をかき 去に仕度 かみに 井明 出 朗報 多津朗 清嵐子 政吉 正 孝 清 清 芳 正 昌 鶏 敏 勇 和 加 栄 夫 代 夫 幸 生 明 泉 吉 月 朗 華 夢 7

腰だけをじっと見ていたフラダンス

大阪逓信病院川柳会(大阪市)

手品師はハンカチの裏をとくと見せ ハンカチを戻もろさがあきれさせ 泣き出した赤児に喧嘩の腰が折れ 三才の孫が立たせた重い腰 すねに傷あって税吏へ低い腰 礼儀作法の先生もやるっまる喰い 再会の喜び礼儀忘れさせ

ハンカサを敷く彼の手に芝生萌え

わか子 鶏 章 しげる いさ夢 弘 実 利 羊 頼

足

道 男

宇部支部句会 (宇部市

路

風

老骨もお座敷小唄の屠蘇機嫌 成人の日に老らくの身をなげき 老らくの寝物語は愚 痴になり 安平次弘道報 東 良 考 月

仙

水

新聞の三面記事は事故ばかり 次々に起きる事故の老てる身 触れでよい女に触れたが動機なり

初けい古松づくしから舞いはじの

手を握る機会あたえず夫婦松 門松を愛して紙にえがかれる 鉢植の松へ米寿の苔がつき おみくじで縛られている宮の松 松の内少々派手な着物に

チッポケな動機が国中かき廻し 各兵衛の父でも生きて欲しかった よそ目にはつまらぬ動機で睨み合い

> 久 光 光 同

雄 郎 郎

平 同

凡

動機を問われ唯なんとなく

人生を割り切りのみたい時に否み

くやしさの些細な動機が家出をし

同

城

路

酒飲めぬみじめ さ宴会小さくい

木

殺人の動機は萬に満たぬ金 ホステスの恋が破れた飲みつぶり

人格をまるだし酒の座を保ち

違い棚余生 違い棚かいて芝居の幕も出来 先代の風流しの ば 年寄りの意見も入れた違い棚 ひよく塚そのかたわらの夫婦松 木次支部句 豊かな謡の す違い棚 (島根県) 美枝子 久米雄 伊久野 君子 中

> 元旦の礼儀は午後からくずれ出し 衣食住足りず礼儀も知らず生き 老らくへまだ一徹が捨て切れず 甘い声つい老らくの血をわかせ

> > てる子

訪問着きれば礼儀を知った額

好き同志愛情論で昼も抜 受情が育って帰るハネムーン 靖国の神になれよと生まざりき 初詣神様より晴着気にかゝり とことんまで落ちて神様呼びにくる かせぎともなれば神様出張し 折詰に雪のせて二次会から帰り 雪になったと晩酌一本追加さし 縄のれん首だけ出しておゝ雪だ 豪雪はテレビに写るだけですみ 賽銭泥神もくるかや知らぬ顔 丸紅川柳句会 森下愛論 き よしを 草右 没食子 ハナ子 宏 愛 高 +

論 児

方

生

村田瓢

E

日の へび皮に替えてもお金落ちっかず 春 12 開 運 か けて初詣 太報 睦 幸

新旧の引つぎつらい握手もし

東雲楼

抱き紙も揃え母のフトさび 寿が白紙に生きて嬉しい日 紙つぶて仁王迷惑そうに立 気の強い二女にひかせてかすばかり 特等をにらんで帰る五等賞 福引の一等マイクがなりたてる タワシだけ買うて特賞当てて去に 賑やかな人でと通夜も飲ませる気 賑やかに送られ左遷の旅に発つ 白蛇に賽銭あがるこの景気 蛇の目が笑うアダムとイブの恋 へびの夢見て十 へび食ってまでまだ二号と続ける気 円 玉 拾 泉 ш. 立鄭 女児太

海電鉄川柳会 (大阪市)

退職日強く押したり出動簿 退職金借りをかやしただけと逃げ 退職を待ってたように女房病み 圭 水報 句念坊

みなつき

退職の社長の額も知らぬまま 退職で最初で最後の金握り 退職で始めて妻と二人きり

水

郎

定退の気安さ後任なかろうか

退職へまだ情 ・退職をして肩 退職後チンジャッジャラで会うばかり 退職へ明日は我が身の机拭く 停年も近く老妻連れ歩き 書の強さ知り 熱が社 を案じ 非 助 子

諫早川柳会 (瀬早市)

川岡霊眼子報

家計簿のここは貴方の二日酔 ひやかしの客と税務署見てくれず やりくりも出来ぬ家計簿叱られる 家計簿の赤字はパパに吐き出させ ギッギッの暮し家計簿愚痴を言い 御繁昌振りをひけらす自家用車 お疑いならと家計簿読まされる るの愚痴家計簿で聞くおやじ 計簿は赤字の中でよく暮し 卓 象 幸 範 信 1 象

> 繁昌は言わずもがなの 金指環 なまけ者繁昌の朝もあくびする 繁昌はうれしい悲鳴人不足 浪花ッ奴儲かりまっかに花が咲き 繁昌を見抜かれ感謝料引かぬ腰 **繁昌を装える暮**の 二代目の手腕はビルの青写真 金づまり 霊眼子 蘇 サワノ 破 可 金

富柳会句会 (富田林市

阿部柳太報

デパートのわたしは甘い甘い柿 回復期飯の甘味をかみしめる 串柿の軒に日にく甘味増し 独りもの師走なんか気にしてず 甘栗の味にも似たる母の味 甘味あるときだけ顔を見せたきり もう少し甘味がほしい患者食 もう甘味ないと女はみぬいてる 福引を心す直な子にひかせ 福引に拍手うって金すられ 福引の枚数数える子供たち 付け落ちのつもりを師走に取りに来た 遠のいた旦那の 不渡りの手形も一度見る師走 つるし柿母の真心とどく暮 足に師走風 摩天郎 栄一郎 六龍子 すみれ 幸 萬 林 月

> こんな良い夫の母がなぜ憎い 下取りと言うて新車をすいめられ ビル工事のりとの声でスタートし 赤い屋根に住んで漢薬うたがカず 八重子 美 市 郎

あすなろ川柳会

不自由と自由が同居する独身のとものとものといる。 虎の巻富樫は知って知らぬ顔 二十年こんなゆたかな世とかわり 花形へ師匠いよいよ容赦せず 束縛を解けば火傷をしてもどり 飲む支度整えており寝正月 花形の悪事は金でもみけされ 通住は自由と書いて来てくれず Ш 本素郎報 慶之助

コクヨ川柳会 (大阪市)

111 П 理 休報

他人に好かれゃと住込るの子を送り住込をいやがる年に成熟し 貧しさに住込みさえも許されず 方言を舌かんでまでおぼえたり 福引がすんで木枯さっと吹き 今日も又ママが引いたらマッチです 住込とかわらんようなようしどの 方言をすぐまねている名司会 方言がどっとあつまる本願寺 方言で彼女不平をならべ立 特賞のタンスまだあり晦日まえ 方言を吐き出し積み込み汽車走る 0 分配課長に一任 ほたる 武 登 広 清 狂 理 照 理 留 N

柳

太

圭井堂

房

(大阪市

大 陸 引揚 柳 人 同 窓 会

案

内……

四月六日(火)晴雨にかかわらず まり翌朝食後散会自由行動。 午后一時頃から四時頃までに集

富岳莊一嚴東郡小山町須走

TELスパシリ四五番

一千円 一泊二食料

です。 二十名から三十名の参席見込人員 る方は到着後お打合せいたします。 解散後の富士五湖その他見物され 不参者は下記宛お送り下さい 大陸風詠 三句 持参のこと

★連絡統一のため、通信、送句、 わせは 兵庫県姫路市豊沢町一三一 問合

井 正

宴会・出張パーティ • 折詰弁当

鮨の店 梅里ノ店 アペノ橋近映地下食通街 阿倍野区松崎町三ノ一〇 TEL(六二)三九三五番 TEL(公三)〇一四七番 (三)七七八二番

串の店

南区畳屋町三ツ寺センター

TEL(三二)九一八四番

楢 玄

路 郎 生



う。★特集は諸家に鳥 大阪あたりの降雪は天 らと言って責めるのも と、豪雪で悩む地方へ 料にはなるだろう。雪 地方の足もとにも及ば き貧乏花好きと言われ に感謝していいだろ ムリだと思う。その点 の同情心が湧かないか に対する実感がない どもたちに雪とはこん ない。こちら方面のこ 雪が降ったが、 する人でなければわか する人生は鳥や花を愛 ているが、鳥や花を愛 た。昔から、阿呆鳥好 について語ってもらっ なものだという教育資 ★大阪に珍らしく牡丹 、根雪の

ると、どっからともな 時、 花作りをやっていた の作君が神戸市の奥で とって光栄でもあり、 められた。これは私に る意味の揮毫作品を求 喜寿金婚に祝意を表す の好意で、私達夫妻の った。★川柳不朽洞会 たものである。まこと ってウロウロさせられ く、「誰れや」とどな 花樹園に入ろうとす していた。誰かが、 九官鳥の鳥籠を吊る の話だが、今は亡き美 かろうか。だいぶ以前 花樹園の入口に、

から

で

満洲、

其他の大陸各地に支部 に大陸の夢を忘れ得な たちに面識があるの 引揚同窓会の大半の人 行脚をした際、今度の があったので、朝鮮、 に、須走の富岳荘で れない。この四月六日 照)弊社ではハルビン 大陸引揚同窓会が催さ い。柳人もその例に帰 ★大陸の引揚者は未だ 北支蒙邏の川柳 (別欄広告参 る。こんな注意してい だとは言えないと思 まらない。これは天災 しい。 や無免許運転や、航空 ても、酔っぱらい運転 の上層部は禁止して欲 そして、航空路は市街 は極刑にすべきだ。 っ払運転や無免許運転 ない。その意味から融 機の墜落は防ぎようが ンとやられたのではた 頭の上からドカ

れる。

信号が青が出ているか 私は"次の青』という 故は今や人類の敵だ。 君に限らない、交通事 りとめたらしい。実男 れたそうだが、命はと 君が交通事故で入院さ の人たちの集まりの上 ので、失礼するが、こ らいの値打ちはある 分で実行している。 モットーを作って、自 っている。★平田実男 に多幸であることを祈 健康が許されない 押しかけゲストぐ

65円

人一册素晴らし

い句

を

発行所

う。 員にはじめて立候補さ 四十年の昔に衆議院議 之助さんが亡くなられ た。私には前田さんが ★自民党の前田房

生が送られるのではな 遙かに平和で幸福な人

っているので、お含み

ほどをお願いする。

るに充分なタイムがあ 由な私でも、悠々と渡 号で渡れば、足の不自 通じるのだ。偽りの多 めば、鳥も花も人語が らない。自然に溶けこ

私の誕生日までには全

と渡るより、次の青信 らと言って、バタバタ

感謝している。七月の

部揮毫を終えたいと思

0

柳友各位のご好意を

ので、申込まれた多数

生の思い出でもある

い人間に接するよりも

ドの上でペンを執っ 苦楽園ホテルでピール ている。ご放念下さ さと聞いながらベッ 書き続けている。少し 病苦を押しても原稿は 刷がはばんでいる場合 速は入学試験問題の印 が、近来の刊行日の遅 ような通信をもらった の遅速を私の健康のバ 三味氏が、雑誌刊行日 社長だった。 前田さんは西宮土地の をのみながら書いた思 れた時に、演説草稿を 夜も午前四時まで寒 く大げさに言えば神ワ が多いのである。私は ロメーターと見ている るが他日に譲る。★啞 長だった繋がりであっ の専務をしていた佐々 ザだと言えよう。昨 た面白い思い出話もあ 木氏が、川雑西宮支部 い出がある。 その頃、 その会社

★川雑支部句会─三月

1

夕、題、媚・粒・速 会・18日(木)六時、 後居、▼南海電鉄句 北門前上ノ町、田中鳥 度、所、上京区相国寺 ▼京都句会・16日(火) 精算・迷い・公立

時、題、

あ ご利用 なたの句帖と あ 九



下是最の贈又出集あ何い整抜なでまがばだ★ さ非適賞答柳来のな冊に理けるおすきらけ路 いごで品に友ま礎たかなにたな使。いしに郎 。利すに句へす稿のでれお句りい句てく、好 用。も会の。が句、ば使の、に会い気すみ (美費#四)

111 柳 雑 誌 社

ン・才女・気休め、 松本吉太郎居、▼阿倍 ラブ。▼明和研究句会 野句会・20日(土)、六 女連れ・梅ぼし・結 ▼富柳会句会•7日 南二百米鳴尾公民館、 - 21日 (日) 一時、 。所、難波高架下親和ク (日) 午后一時、題、 阪神電車鳴尾駅東 童心。真似。才女、 胸・セメダイ 富田林寿町、 東区恩田長沢津秋 大小路、 居、投句先、 • 所、宇部市上宇部 ・脚線美・骨・デート 庫。▼宇部句会・14 電玉造南百米信用金 便り・面あて、所、 六時三〇分、 ▼玉造句会・10日(水)、 三ノ一〇割烹大萬。 (日)、一時、題、 阿倍野区松崎町 金子てる子 題、水・ 宇部市 衿 市 日

川柳

高 鷲亜 鈍

著

人的自覚を促すーここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家とは詩人の民衆的立場を要請した一合は柳会にあって庶民の詩 ★著者は曽て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論 B9型函入

価380円 送費90円

東野大八著

して世に送る一凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書。

風流

B 6型二五八頁

価 250円

送費70円

価 250円

送費60円

が、その雄筆からほとばし、雙手となって帰還した著者

大阪市住吉局区内 発行所 万代西5丁目25

句

集

進を続けている前途ある好作家である。

柳不朽洞会に入って揉まれ、川雑編集部員として精

纖細な新感覚の持ち主である。

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。

(切手代用可

大阪・なんば 東京・日本橋 京都・四 条

▲著者は新進作家で、

JII

柳

され、

ている。

★本

不福は戦

後十三年

間、

川柳雑誌」

に掲載

筆した雄編であ 肩の凝らぬ読物

としてお薦めしたい。

橘高薫風子著

麻生路

郎 序

何

を

選

h

て

Vi

た

7

3

か

先様

お

ね 0

か 商

T

V

後半に川柳に関する卓見もあり、

サクサクたりしものに補

るさまは凄い。

まるで腕の冴えた板前の切れ

味にも似

星

11

ッツク

バランな人生批判が、

まきこまれ

振替口座 大阪 柳 雜 社 JII 誌 電話大阪

お タ

鲤 カ

す

3

\$

品

券を

3

V,

贈 4)

物

カコ

と存 0

ます

C·M·C兒童音楽サ

バイオリン・ピアノ・声楽・チェロ・特設バレエ科

千 林 教 室

大阪市旭区北清水町九六 北清水集会所 バイオリン科

びこ教室

あびこ幼稚園 バイオリン科 電廠1874 大阪市住吉区南住吉四ノー

西九条教室

犯 会 館 バイオリン科 電(刷9836

大阪市西九条

生駒2027

生 駒 教 奈良県生駒町北新町

指

文化会館 原生アート 外数几

近作柳

梅

★サークルに関するお問い台せは下記へお願いたします。 奈良県生駒町生駒本町103 電話生駒(〇七四三七)二〇二七

線全ふ

7

麻 生 7 主字

> 箸 越

足慾

Printed in Japan

昭和四 (禁転載) 一半

○版市住吉局区内万代西五丁目二五番^地 《阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地 石印刷人 年年 麻 一月 生 月 本 --

郎

版格口座大阪七五〇五〇 電話大阪 671 十十年年 一一 、四四〇円 定 価 月一日 発行 廿五日印刷 (送料六円) 男子 日 日 発行 Ŧ 共

B列5号 雜 毎月 誌

川柳塚る 「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。雅号を明記する事。 雅号を明記する事。 柳塔 投 投句は不朽洞会員に 一方四帖」 は誰でも投句が 限る。

(評論 (難林十句以内) (神 無甘切以内) (雑誌十句以内) 号 . 研究 規 麻北川麻 集 定 . 感想 生川村生 月十五日輔切 郎巢郎郎 選選選選

文川方

章塔帖

柳田

毎 (十句以内) (十句以内) (十句以内) (十句以内) 一十句以内 十一切以内 内那松 金国正 谷江。并"広本 きた 光 梅 子 文 半 水 子 郎 里 青 秋 休 客 也是選選 也選選選 募

課

題

吟

集

サショーアイビーカドニカ



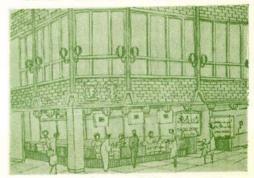
永久電池〈カドニ電源〉を内蔵して

SANYO

麻

●7 C-38型(7石1バンド) 月賦正価…5,240円 三洋電機株式会社

豚饅· 焼売



米斗 広 東 理

ば 大 阪 な 0551 高島屋店・そごう店・天満京阪ストアー店

毎日新聞評

えて、鑑賞の手引に資そうとしたて、ひとつひとつ丁重な注釈を加いらひろった五百六十三句についからひろった五百六十三句につい ら川柳を手がけているというから解生路郎さんは明治三十七年か ている「川柳雑誌」に掲載された この新著は麻生さんが毎月出し 柳歴はもう六十余年にもなる。

柳の味わい方・五百数十句 がなかなかうがっていて、一気にものである。 説ませる魅力がある。

大阪市住吉局区内万代西五丁目 JII 柳 社

生 路 郎 著 好 評 嘈 A

送費八〇円 B 6版 二五〇余頁

南四国 小松島へ 3時間45分 毎日7便

自自中国

なんば発 7.45 9.00 和歌山港発 なんば発 8.40 和歌川港発 10.20 なんば発 10.40 和歐山港発 12.00 なんば発 14.10 和歌山港発 15.30 17.00 なんば発 15.15 和歌山港発 19.00 なんば発 17.40 和歌川港発 なんば発 3.30 和歌川港発

お問合わせ (641) 8686

電話大阪(671)六〇八 長巷口崖 大阪 七五〇五〇

発行所